

大支那大系

に今日は名高くなつた。その雍和宮が如何なる點で有名になりその又參詣者がどうしてかくも多くあるかはこゝに喋々を俟たない。北平觀光者の視察プログラム中にも必ずこれは入れられてあるところが翻つて回教寺院の方はとなると殆んど注意されてゐるものがないのである。上述のニウチエー(牛街)西大寺の如き勅建の官寺はその輪奐の美を賞する價値でも之を訪ねる丈の價値のあるものとして推賞せらるゝのである。

百二 回教寺院内の沐浴と禮拜

南洋馬來方面にて馬來人が回教の禮拜堂内に沐せる状態を見るとその紺碧の清水を湛へたる深い浴室に入り主として足を浸し而かも時間を多くかくることなく、極めて敏捷に一寸足を水中に入れたかと思ふ暇もなく直ちに出してゐるのである。こは固より熱帯地のことである。その風俗は温帯のそれを以つて必ずしも律しられないところもあるが、何れが正式であるかは俄に審かにしがたいのである。今北平の東大寺の小淨、大淨の念入な沐浴法を見てゐれば見れば見るほど實にたいしたものであることが判る。前にも一寸述べておいた通り回教生活ではその小淨の如きはかなりこまかいものでその時間と勞力をかけるだけでもたいしたもののである。

風俗・趣味

回教寺院沐浴の奇習のことは上來幾度か引合ひに出しその都度微に入り細に入りつて説明を加へて置いたので讀者は最早や全部想像せらるゝ材料を得られた事と察する。事頗る君子の口にすべからざる方面の事が多く大分遠慮がちに述べたのではあるが要領の處は推讀せられた事と思ふ。これ以上の話は上海方面の清真寺内部の様子を紹介するときには更に述べべき處もあるが北平方面北方支那の方のことは大抵十分であるやうに思はれる。ところで讀者の不可思議に思はるゝのは平素考へてゐる支那式の衛生振りと云ふものを標準にして考へるときには頗る不調和の話に聞こえる。どうしてこゝまで徹底してゐるのであるが、構はないとなると少しも氣にせず平氣でゐる癖にいかにも宗教的であるとは云へ餘りに八釜し過ぎるややかたであると思はれる。然し實際に見て來ると日本人の考へてゐるやうな一般支那人の家庭そのものは不衛生なものでなくかなりよく徹底した衛生振りを發揮してゐる處が日本人にわからずにはゐるのかも知れぬ。又其點を誤解してゐるのかも知れぬ。平素あの熱した手拭を日に幾回でも出したたりなど、その徹底せる衛生法を見又あの料理法の熱し加減を見ても思ひ半に過ぎるものがあるであらう。自分は寧ろ此點を辯護したのである。回教の沐浴は一日必ず五回ときめられてゐるのであるがその信者銘々の家庭は必ずしもその沐浴場の設備なきのみならず水や湯の不自由なところもあるから自然かうした寺に來ることになつてゐる

大支那系

る。それにしても一日五回とは之が大變なことである。沐浴の五回に禮拜の五回が伴ふ。元來道の爲めから出てゐる事だから苦になるどころではなく自ら進んでやつてゐるのではあらうがそれにしても終日その商館なり事務所などへ勤めてゐるもの又距離の遠隔の地にゐるものなどは困るのである。早朝の小淨の時に一度に片付けて前にとり半日分、一日分をやつてしまつてから外出すると云ふことは出来ない規則である。若し午前中に外出、午後は商店、事務所へ出てツイぞ洗ひに歸る丈の暇のなかつたと云ふやうな場合は夕方なら夕方の勤めを了へて歸つてからその缺いてゐた分の分を餘分に時間をかけて補淨するのである。勿論そのときも口中に經を唱へつゝ敬虔の念で洗ふことは繰返すまでもないのである。これも習慣になれば面倒でなく苦にもならなくなるが、初めは厄介なものであると察せられる。日本人だつてはどかりに行つたものは、その手の汚れると汚れないとに拘はらず必ず氣持ちとして水で洗ふべきことに習慣づけられてゐる。汚れないにきまつても必らず淨めるべきものである。これは氣分の問題であるから一般の支那人々々(一回を除く)の云ふ如く手に着いてゐなければ一々日本人のやうに洗はなくともよさうなものだとはよく云はるゝ事である。手洗のことは日本では一種のまじなひ同様の形式にやることであるから第三者から批評すべき限りではないのである。

風俗・趣味

一回の場合でも、手足の指趾の間から口、鼻、耳などゝあるやうに別段八釜しく洗はなくともよさうなものだとは第三者からはそう思はれ煩る繁に堪へぬではないかと考へらるゝのである。しかし回教徒自身その五回でも十回でも之を少しも繁瑣とも思はずたゞ習慣によつてやつてゐる丈であると云ふに至つては又他から何とも云ひやうがないのである。それと云ふが信仰からばかりでなく衛生の方からも來てゐるのであるからよい事は勿論である。支那人の中にはひどいのがあり、あつてゐるものがある。そこへさしてかゝる回教徒の如き清きものがあると云ふことを云ふに至つては實に面白い對照ではないか。

又回教寺院の禮拜のことであるがこれも前に一寸その異様な禮拜の方法に就いては述べておいたとほりでその擧手、叩頭禮拜をするときその禮拜堂の内部はどうであるかと云ふと晝尙暗きドウムであつて立ち並ぶ圓柱の影もいと莊嚴にそこへアホン始め多くの信者僧侶學生などが禮拜の時刻の合圖が鳴ると豫め堂前に集まり來たり堂前のお勤めが済むと一同靴を脱し簾を掲げ殿堂内に入り來つて堂内の禮拜に移るのである。禮拜には日を定めて大拜のある日もあるが不斷は割に少ない。でもその堂内の禮拜が始まつて暫くすると三々五々と回教帽を被つて拱手した信者が續々入堂して

来る。そして一定の間隔をおいて席を占め、そこで例の擧手の禮をとり叩頭端坐するのである。そのとき教主の念經の聲は堂内柱楹の間に清く響き渡る。そのわざと薄暗く採光を十分にしないで幽玄な趣を咬るやうにしてある設備とその意味の判りにくいアラビア語の發音の餘韻の流れとはそぞろに滿堂の禮拜者をして思はず回回拜分に魅せらるゝやうな感じがしてならぬのである。

回回の禮拜にはすべて目に見ゆる神像を建ておくの必要もなければ神像の畫を掲げておくの必要もないのである。かくの如き偶像めいたものは絶対に必要としないのである。こゝが孔子像、釋迦像、マリア像などを對象として敬虔の念を起こしてゐるやうな連中とはその選を異にしてゐるのであると考へてゐる。回回のあたまでは有形の偶像にたよつたりなどしてゐる方法で以て幽玄崇高なる念が咬らるゝものとは思つてゐない。至聖眞主の神は人間の工作による偶像肖像などによつて現はるべき性質のものではないとしてゐる。露骨に云ふと回回は偶像の前に立たなくては神の心が體得の出来ないとか、神像を見せなくては眞主を信ずることが出来ないとか云つたやうなそのやうな低級なものではないとしてゐる。かゝる偶像神像などから超越して各自のあたまで以つて本當の眞主そのものが視られるものであるとしてゐるのである。さればかゝる見地に本づき回回禮拜堂の内には神像らしきものも何も用意されてゐないのである。又その必要をも認めてゐないのである。

それなれば多數の回回教徒が集まれる禮拜堂には祭壇はあるかどうかと云ふとそのやうなものはない。唯その正面の薄暗き壁に上方圓みのある黒き無地の布をさげてゐる丈である。それも至つて簡素なもので何の事はないのである。その禮拜堂そのものは相當な暗い建物であるが祭壇などはないのである。之については自分たちの見る處では次のやうな解釋が出来ると思ふのである。

回回の禮拜堂は東大寺、西大寺あたりの様子ではその堂内の圓柱の多く柱立してゐることやその堂内の光線をなると弱くし莫蔭を敷きつめ布を敷き流し靴のまゝで這入らせないやうにしてゐると云つたかうした設備そのものから何となく幽玄味を聯想せしむるやうにしてゐるやうである。殊にアラビア語の經典の幽玄なる念經の聲は一層之は人の心を幽冥界に導き宗教化して行くのである勿論回回そのものゝ眼中にはかうした柱楹も薄暗さも念經の聲も要らないものとなつてゐるかも知れぬ。けれども天下の民衆に打つて出る時にはいきなり高尚なることばかりでもいかぬ。銘々その眞主をあたまに描くとは云へ、その人の身邊の周圍をなるとけ薄暗くして幽玄味を増させるやうに仕組み建築の計畫もそのやうにすると云ふことは眞理である。又その回回が各地に清真寺を作り寺院を建て、こゝで禮拜させようと云ふのもそこに歸結する所がなくてはならぬのである。かうしてだんぐ考へて見て沐浴、禮拜等を中心に回回をしらべて興味を持ち、自分は一日西大寺アホンの

大支那系

書齋に納まつてゐたら王瑞蘭アホンより自分に大化總歸四典要會を贈られたのであつた。回回の研究はこの一書によつてその要領を得ることが出来るとの意味なのであらう。該書の内容に就いては改めて今少しく調査を進めて見た上で後日發表して見たいと思ふのである。

何分にも回回は儒佛道の三者と全然その趣を異にしてゐるのであるから從來の三教から類推して速断をしたり、又支那一般常識から推断をしたりすると往々にして誤りを傳へることになる。全然これが勝手の違つてゐる宗教だけに、よほど注意を拂つて考察をするやうにしなければ頓でもない間違を惹起すことになるのである。

百三 回回教徒結束の力

支那一般社會の常識では回回とは猪肉(豚肉)を食べない一と風變つた潔癖性の教徒である位にしか考へられてゐないがその實社會に於ける回回の認められてゐる團結力と云ふものは非常なものである。回回の眼の前では迂かりした事は云へない。不用意の間に失言でもしようものなら頓でもない事になると云ふやうなことを注意してゐるものもある。事實又それを裏書きする丈の材料もたくさんあるのである。

風俗・趣味

前にも述べた如く支那の町には回回とか清真とかの看板文字を見る民家は随分あるのである。北支那は固より滿洲地方でも南支でもかなり多いのである。それならば回回は平素かれら同志の間によく脈絡でも取つて常にかれらの消長を卜すべき何ものか策動でもしてゐるかと思ふと然らず、不斷その見えたところ殆んどがらぐの如く事實又特別の組合組織になつてゐるわけでもない。僅かにその全支に互り招牌回回の看板ぐらゐるが精々のしるしであるに過ぎぬ。ところが一朝事ある時は翻然と起つて名を正さん爲めに戦はずんば止まないと云つた冲天の意氣を示すに至るので天下を驚かせることをやるのである。之を以つて見ると平素互に相知らない間柄であつてもいざとなつたら骨肉兄弟の如くになり結束して他に對抗するの壯心を有するものたるものが判るのである。

一兩年前の事であつた。天津北平の人心に回回が一大衝動を與へた事實のあつた事はまだよく人の知つてゐるところであるが、天津日本租界に於ける某支那新聞が一寸した事を紙上に諧謔まじりに書いたのが導火線となりその新聞社は回回から敲き毀はされて全滅してしまつた事實さへある。と云ふのは大要かう云ふ事であつたと云はれてゐる。

新聞の記事の概要は決して回回に對して感情上どうと云ふ事があつた譯でなくたゞ全く筆が滑べつて揶揄的になつたまでのことである。曰く、もとく回回の祖先と云ふものは猪(豚)から生れ

大支那系

たものでもあるか、その爲めに揃ひも揃つてあの通り回回は猪肉を食はないのだよ云々。と少しく軽卒ではあつたが何の氣なしに文學的筆を弄したのである。するとそれが著しく天津在住の回回清真の連中を怒らせたものと見えて大問題になつた。そしてそれが嚴談や謝罪どころで済ませるやうな簡単なことではなく結局新聞社の建造物をめちやく／＼にして再び起つ能はざるところまでやつ付けてしまつたのである。

固よりかうした徹底した破壊力の凄まじさと云ふのは、回回でなくたつてよく現はすのである。あの通り土匪兵匪などの破壊の力とその手速いこと、云つたら驚く可きものがあるのである。この流儀で行くのであるから譯はないのである。しかし平素普通の生業に従事し何事もなくやつてゐるものをしてかくの如き暴行を敢へてせしむるに至ると云ふのは餘程その間感情を損なつた譯なのであらう。かう云つた名の爲めに憤然として義擧を敢へてすると云つたところにはそこに又頗る面白ところがある。之を以つて見ると平素何ものもないやうであるがその裏面には燃ゆる如き結束力の意志が潜在してゐる事がよく／＼判るのである。回回自身には何ものもないと云つてゐるし又その通り思つてゐるのでもあらうが、何か事が勃發するとそこに結束力の深き閃めきが現はれて來るのである。

俗風・趣味

嘗ては又奉天にて張作霖が新年宴會の招待状の中にその文意が猪肉の饗應のことにわたり回回と豚肉との事に及び萬里同風、當世風に豚肉をも用ひて宴を張るからと云つたやうなことを書いたとかにてひどく之が又回回を怒らせ、結局重大事件を惹起した。そして御大張作霖自身に出頭してあやまれと責め付けたのであつたが、どゞのつまり張學良を代理にやつて謝罪せしめ、且つ五萬金を罰金として吐き出したとか何とか云ふ風聞を耳にしてゐるのである。恐らくこれも新聞に公になつた事かどうか知らぬが、かゝる事實があれば必ずむきになり回回としては等閑に付しておかない事だけは事實であるのである。

かくの如き機會があれば回回は決してだまつてゐないのである。必ず結束して討てや懲らせやその復仇を遂行して止まないものである。かうした事例からすると近來北平牛街方面に入り込んだ回教彼以外の俗人ども家屋敷をこゝに求め時に食用の猪(豚)を車で運び込む場合もしやその續み荷の猪(豚)たることの知れたときには、始んど袋叩きにされてひどい目に遭ふのだと云ふことである。恐らくこれも本當の話かと思はれる。豚の話はどれ位回回をして結束せしめてゐるか知らぬ。されば牛街、教子胡同あたりの界限では豚の話もおち／＼出來ぬのである。別段わきから見てゐては回回が社會的に低く見られてゐるわけでもなしそれ程までに強く固くなつて一般民衆に抗して行か

大支那大系

なくてはならぬ理由がどう云ふ點に在るか。どこにそれ丈結束を餘儀なくせしむるを得ざるほどのものがあるか。自分が回りに就いて最も力を入れて研究して見なくてはならぬと考へる點はその結束する力を得てゐる裏面にはいかなる事實の伏在するものがあるか。この點であると考へる。支那は全體に五千萬からゐると算せられてゐる回りの結束力と云ふものは回回獨特であつて、儒佛道の方へは影響をして來ないのである。基督教などの如き新しい外來宗教には何等結束と云ふものもなく表面はともかく裏面の消息は大抵見え透かされてゐるのである。ところがひとり回教に至つてはかくの如きものである。而かもその譯が未だ判らないのである。その判らない處に幽玄なる或るものが存してゐるやうに思はるゝのである。

打明けたところ自分自身も支那の回りに就いては永年の興味を持つてゐたが未だ専門に之を調べるところまでに行つてゐない。支那の宗教思想界の概觀をやるものは是非とも此の回りの事も看過すべからざるものであると云ふ以上餘り深くしらべてもゐないのである。しかし他の一般文化の立場からして回りの大局を見るとどうして社會があつた通り道教的迷信の旺盛を極めてゐる現代支那でかう云つた高尚な信仰の方面に向かふ傾向を持つたものであるか。その邊はよくは判らないのである。人或は云はん支那人にして豚料理の濃厚なる脂肪質を好まない連中があつてそれらが之に向か

風俗・趣味

ふのではあるまいか云々と、かやうに考へて居るものもある。がしかし回回のためてゐる羊肉や鶏肉だつて脂肪の濃厚なものがかかなりあるではないか。或は又豚そのものが不潔な動物の代表的のものでともある如く冤罪を被らせてあるが豚くらゐ清きを好むものはなくその自己の便所たるべき地點でもきちんと之を定めてゐる。又乳兒の口にする十四又は十二の乳房を取り間違へることなくそれ／＼自分で吸ふて相侵すことなき如き性質を有するなど存外几帳面にしてよく清淨を好むところのあるは顯著に認めらるゝのである。元來アラビアの熱帶國ではもと／＼豚を好まなかつた又豚肉を食はなかつた。その古來の習慣に想ひ到らば今日支那に於ける回回の豚肉を採らざる次第も自ら釋然たるものがあるのである。

回教徒の結束の力は宗教的方面よりは之を社會的に見て恐るべき現象を呈するのであるからこれは他の種々の社會現象と共に尙より深く研究せらるべきものと思ふ。紅槍會や大刀會の如くその經濟問題と聯關することはないらしい。回回はその始めから思想的に精神の方のみ出て來てゐるだけにそこに熱烈なるものがあるのである。儒佛道と同等或はそれ以上哲學的などころがあり、又道徳的などころもありして一種の精神的結合をなしてゐるものらしく考へらるゝのである。たゞ之を社會的の方面から見ると滿洲方面には宛も猶太人の如く巨萬の富を有する富豪のもの多きも、

系大那支大

支那本邦に在りては回教の間にはその巨萬の資産を有すると云ふものは少なく従つて回教内部の事業も議論のみ多く實際は遅々として進捗しないと云ふ現狀に在るのである。

百四 川村狂堂君の回教三昧を頌す

回教徒の事情に通じその消長を知るには自分自ら回教に入り清真寺の堂内に回教と生活を共にするところまで行かなくては嘘である。自分たち第三者の位置に立つものは本筋の回教の苦心、三昧の味は判らぬものと思ふのである。

支那の事件はどの方面だつて無限の深みを有し容易にその内部のことは推測しにくいものであるが回教の如き普通一般から隔離せるものに在つては表面の現象だけでは殆んど何にも判らぬのである。さらばと云つて自分共回教になり澄まして抜き差しならなくなつても困る。その爲め氣持ちはあつても十分之を専門に嵌まり得ない譯である。ところが日本人にして永年此の回教の道に入り常に回教と生活を共にし全く回教三昧に入り數十年に亘る支那各省各地遍歴の大業を了へさせられ今や北平の西單大街、清真寺内にその研究に餘生を送り居らるる川村狂堂翁をこゝに得たることは自分共の衷心愉快に感ずる所である。狂堂先生夙に理學に通じ博物に細しくわけて従來の哲史

味趣・俗風

文に互る古人の學を修められその蘊蓄を傾けて専ら回教の調査と研究に従つてゐらるゝの風懷は在支日本人の推獎措く能はざるところとなつてゐるのである。自分たちの回教調査に就いても狂堂先生に負ふ所が少くないのであるが先生には北平にて雑誌「回教」を發刊しその研究の緒を隨時公にしてゐらるゝは斯道の學徒の爲めどれほど爲めになることか判らぬのである。その調査の發表になつたものによつて見ると北平に見出さるゝだけの清真寺は次の如く多數に上つてゐる。参考の爲めにこゝに之を挿入して見よう。

北京清真寺の所在

- 一、宣武門外 牛街（官寺、俗稱、西大寺）
- 二、宣武門外 教子胡同（官寺、俗稱、東大寺）
- 三、前門外 笤帚胡同
- 四、崇文門外 花市大街
- 五、崇文門外 唐刀胡同
- 六、崇文門外 堂子胡同
- 七、宣武門内 西單牌樓大街（俗稱、新寺）（小廟の改造）

北平回教寺に發見せし秘話珍談

大支那大系

- 八、宣武門内 牛肉灣胡同
- 九、宣武門内 手帕胡同
- 十、平則門内 錦什坊街（有名なり）
- 十一、平則門外 三里河
- 十二、平則門外 關廟
- 十三、安定門内 二條胡同（官寺）
- 十四、東回牌樓 大街（官寺）
- 十五、齊化門外 上坡（北京唯一の新派官川派、俗稱、搔頭教）
- 十六、齊化門外 下坡
- 十七、齊化門外 東八里莊
- 十八、府城門 回子營
- 十九、西直門外 關廟
- 二十、西直門外 海甸
- 二十一、西直門外 安河橋

風俗・趣味

- 二十二、西直門外 藍田
- 二十三、東直門外 二里莊
- 二十四、後門内 剪子巷
- 二十五、後門外 什刹海
- 二十六、後門外 粉子胡同
- 二十七、後門外 鼓樓西（新寺）（小廟の改造）
- 二十八、德勝門外 關廟
- 二十九、德勝門外 馬甸
- 三十、德勝門外 清河
- 三十一、德勝門外 沙河
- 三十二、齊化門内 小街
- 三十三、齊化門内 祿米倉胡同
- 三十四、齊化門内 豆茅菜胡同
- 三十五、崇文門内 蘇州胡同

北平回教寺に發見せし秘話談珍



大支那大系

- 三十六、崇文門内 丁字街
- 三十七、宣武門外 輸入胡同（女清真寺）
- 三十八、前門外 天橋路
- 回教墓地の所在

一、平則門内 三里河

二、德勝門外 大關

三、德勝門外 馬甸

四、齊化門外 八里莊

詳細は（回教）第一卷第六號（北平東城小土地廟第七號回教研究會發行）参照。これら清真寺の研究にしろ回教そのもの、該博なる調査にしろ自分は川村翁がその全力をこの事にかけてゐらる眞摯なる態度に萬腔の同情と謝意を表すると共に此の崇高なる研究を達成せしむる後援者篤志家の日本内地より出でんことを希望してやまないものである。自分は支那文化研究の進展と共に此の種のかくれたる宗教思想の研究調査のとかく暗みから暗みに葬られ世間から看過せられてゐたことを遺憾に思ひ出来るだけ明るみに出すことに努力したいと思ふのである。一言こゝに附記して愛讀者に訴へる次第である。

附記 尙上海方面の回教清真寺についても實地踏査せるもの色々あれども、これは次の機會に紹介することとする。讀者之を諒とせられたし。

北平の回教寺院と限らず南方のそれと限らず支那に見る回教徒の習慣には趣味を持つて研究して來るとかなり變つた風俗があり、その間又支那民族の宗教方面の習性を窺ふ上に好資料となるものが多いのである。これは恐らく道教方面の諸廟に見る奇習と伯仲の間にあるものとも見られる。支那は風俗趣味の上から之を觀察して來るならばかうした宗教生活の中かなり豊富な材料が潜んでゐる。それは單なる教理とか儀式とか、修養とか云ふきまりきつた形式の上には見出されないのであるがその日常の信仰生活の上に欺かざる心の現はれとして極めて眞面目に行はれてゐるのを認める。若し支那の風俗趣味を熱を以つて調べて見ようとするものは此の點を看過してはならぬのである。尙上にも述べておいたやうに該回教寺院の叙述については全篇に亘り度々その奇習の繰返された處があるがそれは原稿の隨筆的なりし事と一つにはその事柄の記載に氣兼ねのあつた爲めである事を附言しておく次第である。

風俗・趣味

北平回教寺に發見せし秘話珍談

味趣・俗風

二十五支那八選

百五古玩店頭

支那に遊び支那人の處に訪ねて行くことは支那癖の自分共に取つて何よりも快事である。と云ふのは支那人には何とも云へぬよい心理がある。味はつて見れば見るほどよい味が出る。之を東洋の楽器で云つて見れば、月夜庭前に佳人を前に古琴を弾すると云つた感じを催させ又その情緒を咬るものがあるのである。

北平にゐる時でも南京にゐる時でも私はひまある毎に支那古玩店などに遊びに行く。行くといふよりも素見かしに出かくるのである。その時氣もちのよいことは老朋友の番頭主人公がいつでもニココ面で歓迎の意味を言外にほめかしそして面白さうな古美術品を取出し自分に見せてくれる自分は之を別に特に購ひ求める積もりでもないから唯觀賞的に之を見て楽しんでゐる丈けのことである。ところが番頭の方でもそれで結構満足をして紫檀の十景椅子八仙卓を前に請坐請坐といふ坐を占めるといふとボーイが熱い茶を運んで来る。

支那大系



北平城内の露店に見る焼土各種、西直門邊にあり

その店へ毎日のやうに遊びにまゐつてゐると仕舞には意外な品物が掘り出されるのである。番頭

五二六

は商なひが上手で自分はいつものやうにお茶を出されてゐる。それだから遂に珍しい洛陽の土偶なり何なりを一つ二つ求めて見ようと云つた氣分に化せられてしまふ、だんだん比較研究を重ねてゐるとその棚に飾つてある十個ばかりの土偶が全部氣に入つて来る、そして之を全都よい序だから求めようといふことになる、こちらでは番頭が全部まとめて買つてもらへるなら何よりだこは少々値段のところもまけてくれるだらう位に考へる。しかしそれは日本人の常識である。中々負ないのみか、案外なことを云ふのである、番頭は

「この洛陽の土偶は二つまではほか様でないから閣下にお譲りが出来るがあと八つは折角だけれどお

需めに應ずるわけにまゐらぬ、どうも遺憾ですけれども……」それは又どういふわけかと聞くと、「閣下も弊店の老朋友であるけれども、尙他にもお得意様がある。之を残らず閣下だけに買取られてはあとで他の買手が見えたとき店にその品物が無いことになる。それだから私の苦衷をも察せられてどうかあとを買占めることだけは御勘辨を願ひたいものです」といふ。

支那商人の商ひの上のコツは確かにこゝに在る。もし此れが日本人であつたとしたなら、大道の縁日の植木屋ではないが、手を小氣味よくパチとたゞいて「全部残らず願はるゝなら勉強をしておきますよ」と来る。そして眼中あとから来る客などお構ひなしである。若し來ても「お生憎くさま賣れ切れまして」とやつてしまふ。支那商人の心理にはかう云つた香ばしい微妙な處に特色があるのである。

百六 辭令の情味

東京の電車内に「煙草御遠慮ください」とある。これは大阪の電車内に「たばこのむな」と禁止的にしかも無愛想に掲げられたるに比べたならば、どの位婉曲でかつ客の氣持を尊重してゐるとか判らぬ。東京は流石お膝元だけに、品のよい言葉が多く用ひられてゐる。

風俗・趣味

大支那系

しかし支那に渡つて見ると、東京よりか更に段ちがひとつてよい位に、婉曲にまた優美にいひ現された用語が各所に見出さるゝのである。日本全國いかなる所で用ひられてゐる用語よりも、支那のそれが確に數等うまい所を外交的に現し妙域に達してゐると評せられる。時には人をあまりに持上げ過ぎて齒の浮くやうなひかたをなせることもある。けれども人間は感情の動物だからよくいはれて腹の立つやうな人はゐない。そのデリケートなところを掴み人間の面子を重んじて、拜み倒してゐるところは寧ろ物凄いやうである。何でもない事であるが、同じ貼り紙を用ひてもその文句に雲泥の左がある。

日本——この處小便無用

支那では——君子自重

と書く

「閣下は君子だから自重してくださるでせう。まさかこゝで用足しなどなさるゝやうな野人とは選を異にしてござるでせう」

と持上げられた意味合ひが言外に見えてゐる。

日本で——無用の者入るべからず。また通りぬけ無用。支那では——閑人止步、又閑人留歩、又

閑人免進

と書いて貼札するのである。閑人は遠慮してもらひたい。這入らないでくださいの義。八釜しく云ふと工程重地、閑人免進などある所もある。衙門とか要塞地とかに、かゝる文字を見ることがある。また話はちがふが、人を訪問しようとして、明朝在宅か否かを豫め問合せることがある。するとその返事が巧妙を極めてゐる。曰く、

日本で——御來駕御待ち申上げるを、支那では——清徑待駕

門内玄關先の小徑を閣下のために掃除し清めて待つてゐるから、御來駕を賜はりたいといふ義である。人の氣持を喜ばせて、大いに構つてくれるといふ心理は、昔から支那一流で、辭令にたけたものであるといはなくてはならぬ。

百七 清濁併呑

清き水に魚棲まずとは、よく魚の心理を看破した言である。清水なれば必ず蘋藻か文石か何か魚の據るべき物を入れてやるべきである。

人間の心理を察して見ても、同じことである。余りに注意の行届き過ぎて一分一厘の際もないや

支那八選

味趣・俗風



大支那大系

うに出来てゐる人は、人の長として立つに餘りに完全過ぎて、薄氣味悪く感ぜらるゝものである。またその餘りに條理整然として一滴の水も洩らさぬといつた嚴重な氣構へでゐる人は、人の長としてこれ亦完全過ぎて、誰人も懐しみを以て接近して來るといふことがない。

凡そ人間社會は萬人の心を標準として發達し、民意衆目に叶つた大勢で以て推移して行くべきものである。わけて支那の社會は、その處のコツが一般に最もよく諒解されてゐる。そのためであるか支那では、社會的にその人物に接して見ると、實によく個人々々としての心理がよく練れてゐる。懐しみが深くまた人情味が多い。といふのは、支那の人々らる清濁併せ呑む態度の大きいものがあるまいと思ふ。中には清は吞まず、濁濁専門で呑んでゐる者もあるが、實に應揚なものである支那にも、近來の外國思想にかぶれ、小理窟を列べることを名譽の如く穿きちがへてゐる者もないではないが、一般に支那の大人ともいはれる人は、大抵氣が海の如く大きく、事に當つて餘りにコセつた事はいはない。また知つてゐても餘り知つてゐる顔をしなない。相手の顔にかゝるときな

ど知つてゐても我門不知道の一本槍で行く。

時には甲でもよし、乙でもよし、丙でもよし、丁でもよしで、結局何だつてよろしいのか、あるひはどう考へてゐるのか、その邊が薩張り判らぬことがある。人生そのものがはつきりせぬものだと諦めてゐるのかと、かう取る人もある。しかしその態度のうちに、人を惹き付けチャームするあの強い力を有してゐる。

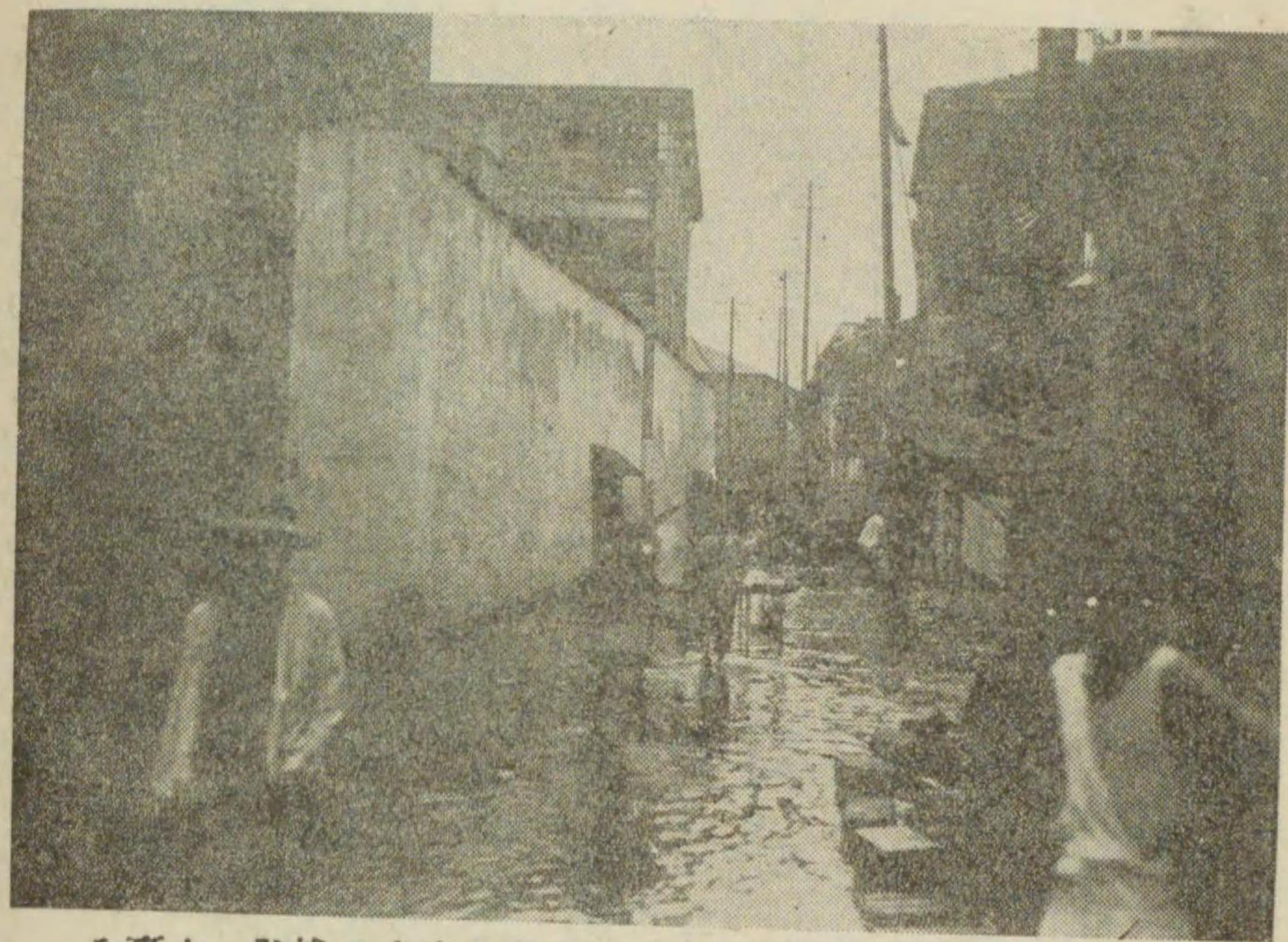
百八 歐米人の支那趣味研究

ひとり米人と限つた譯ではないが、歐米人一般に、支那に觀光に來るものは東洋が面白く東洋の風俗が面白いと考へるものが多い。従つて支那に遊べば必ずたとひ眞鍮細工のけばくした工藝品にしる、それに支那の風俗なり景色なりの彫刻してあるものや、寧波の柳細工といつたやうなもの何でもないやうなものであるがそのうちに支那古今風物の窺はれる材料を努めて集め求めやうとしてゐるところが見られる。

ところで日本人は支那に來てどうかといふと、支那が隣國であつて珍しくないと思つてゐるのであるか、風物なんか判つてゐると多寡を括つてゐるのであるか、支那の風物なんていふ方面のことに興味を持つ所の人は甚だ少い。固より一部の熱心家やその方面に道樂のある人は別であるが一般の日本人で支那にゐるもの、または支那に觀光に出掛くるものは、ほとんど極端にその方面に理解がない。その癖その風物に關することは、田家の生活にしても、牧畜の様子にしても、禮拜

風俗・趣味

大支那大系



漢口中市夏季氾濫の時期にときどき出る水の状態、土を襲  
築大洪水を防止するところあり

祈禱の形に現れたものにしても、存外明かになつてゐない。

歐米人は支那に旅行に來ても、支那民族の生活殊にその精神生活の信仰方面とか、寺廟の様子とかを知らうと努めてゐる。さういつたことに深いインテレストを持つてゐる。求めるものは上海あたりに見える時計、靴、緞子類、それに紫檀の卓、茶棚、翡翠といったやうなものが多い。實用といへば實用一點張りであるかも知れぬが支那人の氣分なり趣味なりのよく現れたものを求むるといふのは少い。

支那人の目に映じた點からいふと、歐米人は支那人の生活を理解し、支那人の藝術趣味

を知らんがための材料を求めてゐるといふ風に見える。随つて米人向き、歐洲人向きに造られたものが手軽いものに澤山ある。日本へも黒扇子や茶碗(ラスイ・チャイナ)などの出たこともあつたが、概して緞子、指物類といったやうなものが多い。それも税金の關係で、この節はよほど減じて來た。支那の風物をよく見てゐるものには、支那に對して趣味を感じるものが深い。支那人の間には、日本向きのものを造ることに相當苦心してゐるものもあるが、日本は餘りこれを取り入れようとはしない。むしろ米國とかドイツとかチエツコ・スラヴとか英、佛とかいつた方面に多く迎へられてゐる。

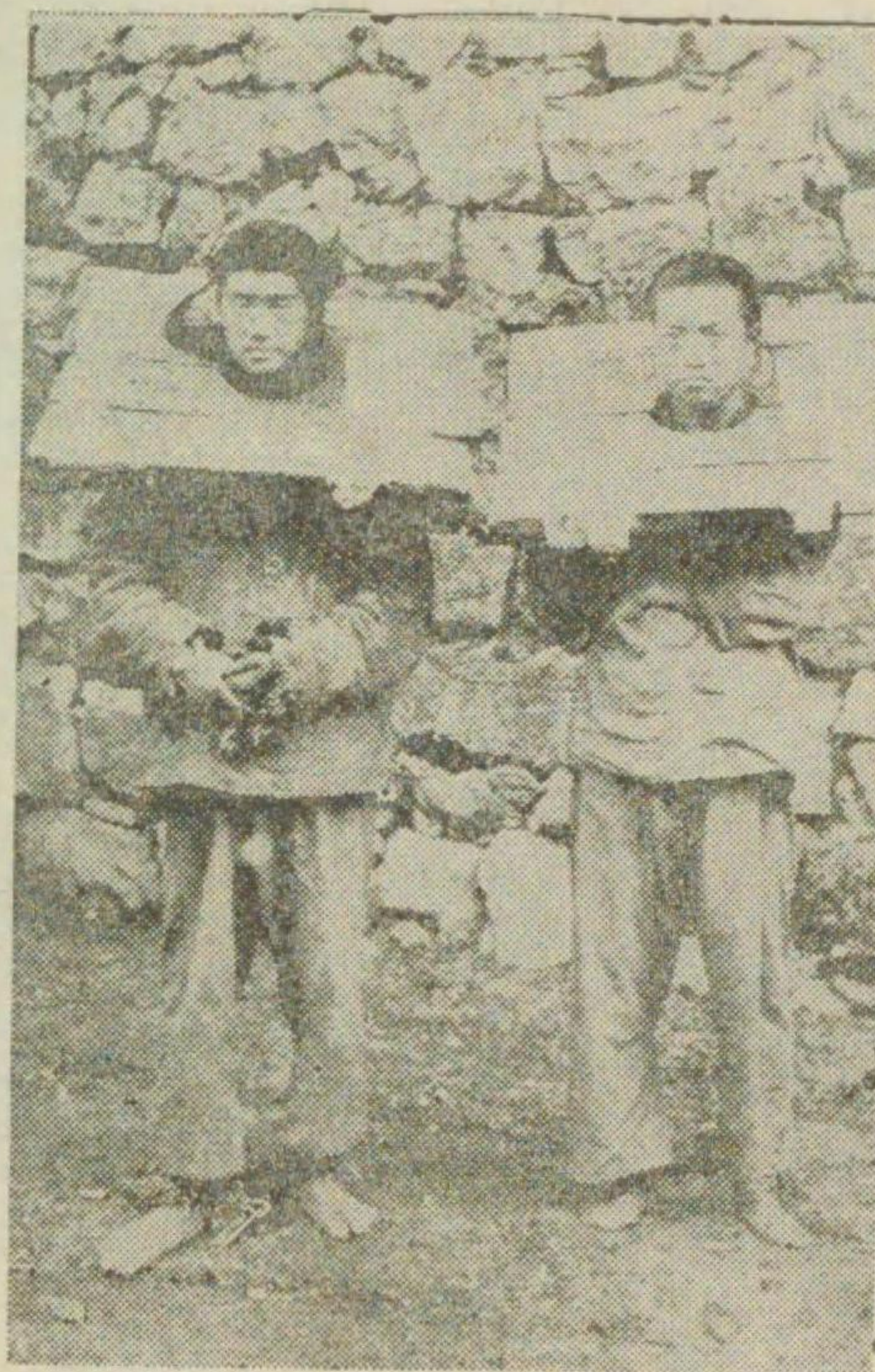
最近ドイツあたりに取り入れられてゐる支那流のデザインは驚くべきほど澤山で、また實によく巧に取り入れられてゐる。日本人はやゝともすると、美術學校あたりでもそれがドイツ獨特のものやうに考へる。併し焉んぞ知らん、それは支那から取り入れた意匠そのまゝのものであるといつたやうな事實は非常に多い。

百九 不安な社會

支那文人が文字を弄び文學詩文を嗜むなどいふは、支那全體の社會からいふと一小部分の話

大支那系

で一般には適用が出来ない。高尚優美な遊びだとか、琴士の清游だとかいつて見るところで、一般支那民衆、百姓（セイ）のものを標準として考へた慰安、享樂にはならないのである。何といつても支那人の嗜好は麻雀であらう。また支那料理を中心とする歡樂の生活であらう。



北支那の内犯罪人の刑處情、態、首、せを施して來往人、見せめとす

事のないこと、またいくら財産を溜て見たところで、この節のやうに苛斂誅求または没收せられること。かやうな風では折角働いても何にもならないといふ氣持ちがしてゐるのは當然である。自分はこゝに半分は支那人流のあたまになり、またその式の常識を以て計つてゐる加減かも知れないが、何れにしても氣の毒なやうな氣がしてならぬ。支 各省各地の良民だちに會つて見ても、

將來どうすることが樂みであるかといふ望みのあるでなし、窮極の處は唯横暴を極めた人間にせしめらるゝ位が落である。或は司令のブラツクリストに載せられて、早晚その没收又は重い税を仰つかるが落である。北方なら軍閥系の軍隊の高壓手段で取られて了ふ。南方なら國民政府から、土豪劣紳とか逆産とかいつて取られてしまふ。名目は共產主義の、民主々義のといつて見たところで、つまり腹の底は同じことである。良民こそ溜つたものでない。

支那青年で日本に留學し藏前の高工を卒業しても、支那に歸つてから仕事が出来なければ萬事休する止むなく蒋介石の秘書位になるのが落である。といつた實例もある。支那四億の民衆は、その文字あるものもなきものも、人生を眞に楽しむといふとき何を主眼として考へてゐるか。ぶち割つて洞察して見ると、表情實に同情に耐ないものがある。物質的に恵まれてゐる國でありながら、個人としては中々さうは行かず、さりとて榮達の路はこの動亂の世ではあてにならなくなつてゐる。支那國內にゐる支那人の社會生活も、かくの如く氣の毒な情態であることに對し理解がなくてはならぬのである。

風俗・趣味

百十米國で大持て

大支那系

支那の華僑が南洋の天地で成功の域に達し、天晴れ南國に日本人や英米人を凌駕しその經濟的進展を遂げてゐるとの美談は、世人の夙に熟知せる所である。近來また在米の支那僑商が、かの支那移民入國禁止以來、めき／＼その腕を認められ、かつ各方面の實務に調實視せられ、益々その位置を高むるに至つたものが少くないとの事である。

在米支那人の生活法が日本人のそれよりも米國流に似た點の多きだけでも、事實上便利であり又有利である處へ持つて來て、支那人の氣質態度は米人のそれに近い處がまた中々に多い。米支關係は今日色々の方面から接近して來てゐる。支那人がたとひ心にはどうあらうと、その是非々の宣傳に興味と力とを持ち、侃侃諤々の論をやるどころなど、殊に米人に好まるゝのである。

米は從來支那にたいした深い立脚地を持たない所からでもあらう。頻と機會均等論などでヤング・チャイニースをおだて上げ、在米支那人の喜ぶ態度をいかにもわざとらしく聲明する。日本にはそこまでやる國民外交が生れてゐない。米國で生れ米國で教養され、既に五十有餘年の長年月米國で仕事をなし、米人を家内にもらひ、純米國流に人生を送つてゐるといつたやうなものはかなり多い。米國でたとひおだて上げられてゐるにもせよ、居心地よく着々成功させてもらつてゐるといふ時には、悪い氣持になる道理がない。米國で華僑が成功し、ミリオネアがいくらも輩出してゐるといふのも、偶然ではあるまい。

日本では、神戸でも理髮業者が支那剃頭的として開業してゐるとすぐ日本人側の同業者からこれを妨げ、試験制度に改め、支那人に否ばしからぬやうにしてしまふ、横濱では震災でトータル・ロスとなり、ともかく日本では成功がむづかしいとされてゐる。そこへ行くと米國はよい所で、おほ持つてゐつて、經濟的の車輪はよくまはる、支那本國の内亂の事などお構ひなしで、自己の運命はよく開拓されてゐる。

百十一 輕業好き

支那人のある種類のもは、人から頼まれもしないのに、人の懐を宛てにして勞力を惜まず精勵するものがある。よく名所舊蹟を訪ねてゐると、どこから現れるともなしに、案内をしてやらうといふ子供が出て來て、しまひには手を出して錢を要求するのである。山東の曲阜だとか北京の西山とか南京の孝陵あたりにはそれが多く、また支那は都鄙何れの地方に行つても、市民一般が興味を持つてゐる所からして、よく大路で人のかたまつて集まつてゐる所を見ると大抵そこは手品輕業をやつてゐるのである。その手で以て上海あたりでは、船の出帆どきを狙ひその出帆その一時間、

風俗・趣味



大支那系

または三十分間ウェイサイド(威塞士)の棧橋のところあたりによく子供を二三人つれたおとなの軽業師が、船中の客殊に一等客の外人を目當に、又それを見送つて來てゐる紳士淑女連中をあて込み、衆人環視の間で軽い得意のところを始めるのである。



名優梅蘭芳君の素顏 國際的評判となれる北平梨園界

先づ始めはいつもの通りの皿廻しである。十二三の子供が二本の棒を持ちその棒の先きで皿を廻すのである。またよく見る藝當ではあるが、コップに水を入れたまゝ額上或は額上におき、水をこぼさないやうな姿勢をとつて動き廻りつゝ、なほかつ例の皿を廻してゐる。またコップや皿を用ひずただ單にふたりの子供を大人の左右の肩の上に、或は腕の上に、それぞれ大の字型に立たせて手輕い

離れわざをさせて見せるといつたやうに、頗る觀客の心理を惹き付けることに巧を極めてゐるのである。

船からは、上海を立つてしまへば不用になる小銀貨のシヨウヤンや銅貨などを、バラ／＼と投げてる。うまく帽子が受けるときもあるが、時にはころげ／＼江中に落ちさうなのを追つかけてゐるやうなこともあつて、かなり座興になる。僅の出帆間際の時間を利用してよくもうまいチャンスをとらへたものである。

百十二 若返りの壯陽法

支那では手の爪を長く伸ばすことを喜び、時には二寸も三寸も長くしてゐる老人を見ることがある。又長耳と云つて耳朶の長く垂れてゐる人を尊び、殊にその耳の孔から長い毛の生ひ伸びてゐるのを喜ぶ。或は又長眉と云つて白眉の長く眼を蔽ふばかり生ひ伸びて垂れてゐるのを好む。かう云つた嗜好趣味は支那人獨特の心理であつて所謂支那趣味のうちでもこれは又特に興深く考へられてゐる點である。

その長爪の極端な人になると毎夜寝るときに必ず袋を忘れないやうにして後生大事とその長爪を

風俗・趣味

大支那系

包み夜具のそとに出して寝るものさへもあると云はれてゐる。自分はその長爪の人の寝てゐる場所  
は見たことはないが晝間その袋を抱き、自分で自分の手を擁し如何にも虎の子でもかばつてゐるや  
うな恰好してゐる姿を南支那の田舎で見たことがある。かやうな風習は、支那に行つてゐると時折  
り見るのであるが、日本では話しても一種異様な風に感ぜられるであらう。

支那ではさまざま不思議に思はれてはゐないのである。と云ふのは支那人の間ではその最も共通  
に而かも又その最も熱烈に欲してゐる所の思想に不老不死とか不老長壽とか云ふ考へがあるによる  
のである。そしてその長壽であればあるほど人の美望の的となり、その長壽の人を尊敬するは固よ  
りのこと、長壽の人のすることを見習はんとするの風がある。長壽の人が特にする譯でなく、自然  
動作の上に見られる所の所作でもよく世人の注意を惹くに足りるのである。

長爪、長耳、長耳のうちに生へたる長毛それから又白眉、長眉と云つたもの、これらは總てその  
老翁長壽のシンボルとして見られてゐるのである。支那では思想的に近來大分新しい事が云ひ出さ  
れ、モダン・ガールの出現まで見る様になつてゐるのであるが、それは上海漢口の如き開けた開港  
地の巷で見る話であつて、田舎の奥地に這入れば依然昔ながらの遺風が認められ、古い型の老翁  
だちが長い大きな煙管を片手に田家の軒下に悠然とたゝすみ、通りがかつた自分だちをつかまへて

呑ん氣な話をしかけて來るのである。

支那の田舎は山村水郭どこへ行つて見ても頗る悠揚迫らざるところがあり、その景色も大きく伸  
んびりしたものである。南方は南方なりに北方は北方なりに矢張り大陸的のところがあつてうれし  
い。實に大まかな大陸氣分を特色  
となし決してこせついでゐない所  
が愉快である。

不老長壽星瑞鹿の繪押



不老長壽星瑞鹿の繪押  
るは使てしと物贈にめ爲ふ祝を壽長老不

風俗・趣味

てゐるのを見るのであるが、一度もし城外なり田舎なりへ踏み込んで見ると、もはや全く別天地  
をなしてゐるのを見る。

そこに支那の支那たる大自然が  
現はれてゐるのである。勿論支那  
だつてその市井の巷に踏込み之に  
出入して見ると、元來人種が違つ  
てでもゐるのでないかと思はるゝ  
位に忙はしく、騒がしく、活動し

大支那系

支那の田舎は別天地の境涯をなしてゐる所であつて都人士には経験の出来ぬくらの幽情を暢舒するに適したところなのであつて、全く浮世離れのしたところである。例へば四川省三峡に見る巫山峡中とか風箱峡白帝城のあたりとか、あの邊の峡中雲外の秘境と云ふものは全然俗界から離れたところの仙境をなしてゐるのである。

支那にはこの秘境に色々不老長生の靈藥があるとか、秘藥が調製せられてあるとか云ふやうに云はれてゐるが、勿論それもあつてある。随分たくさん色々出来て愛用されてゐるが、しかしかうした別天地にゐて、何不自由不満足を感じずしてオゾーンの多いよい空気を吸ひ、新鮮な蔓草、木耳、木の實、穀類を採つて日常生活をなしてゐると云ふのであるから、たとひ何首鳥の栽培などせなくとも、自然そのまゝの生活法が即ち長壽法に叶つてゐるわけである。

四川省には各種の長壽秘藥が出来てもゐるが、第一の根本方法はその山中に住まつてゐる人々の氣分の問題である。山中曆日なしで舜の野を耕すと云つた日の送りかたをして漁樵問答にこれ日を消すと云ふ方法であつたならば、祈らずとも神や守らんで山神がかやうな山人には長壽を授けてくれるのである。吾人はその心のもちかたを如何にするかの第一義を果してゐるならば、長壽良藥の如きは末の問題となるのである。

風俗・趣味

日本で神經衰弱病者になつたものなどはよろしく日本で入院して藥罐を枕邊に置いて不景氣の顔をしてゐるよりも支那に渡つて長江の大を眺め、そして洞庭湖に秋の月を賞し或は三千坪の大筏に身を托して半歳を長江下りに費すと云ふ風にするが妙である。或は四川三峡に遊び李白の故事に倣つて浩然の氣を養ふと云ふ方法をとるならば神經衰弱の如きも苦に病むには及ばなくなるのである。かう云つた大陸氣分に浸り水牛に跨れる牧童の景趣を友として自ら畫中の人となり、悠悠自適の生活を送ると云ふやり方が何よりの長壽法となるわけである。

但しかうした支那流のやり方も結構であるが、そのあまり阿片室にとちこもり阿片の吸煙病にかかると云ふと、結局は逆にからだを亡ぼすことになる。モヒをやるのもからだにさはる。この二點に注意して悠々氣にむくやうやつて行くことは、最も不老長生生活の秘訣に叶つたわけである。

支那には毎々發表せる如く、その方面の靈藥として三蛇膽酒だとか、虎骨木瓜酒、周公百歲酒、長春酒など色々色々のものがあるが、それらは生理的に一種の若返り法となり、又一時的の勃起劑として役に立つことは立つものであるが、根本問題には觸れないのである。

根本はどうしても此の氣分の持ち方次第で脱俗の境涯に身をおくと云ふ點に在るのである。之を體驗せんとするには、日本にゐては到底その感じが出るわけがない。どうしても支那へ親し

大支那系

く出かくることが、何よりも、その解決の第一法となるのであると信するのである。

二十六 支那民衆奇習

百十三 四川の紅本黄表紙

支那ではどちらの田舎に這入つても随分下等なツアオチー（草紙）と稱するちりがみがある。四川省あたりでは萬縣を中心としてかなりそのひどい草紙の産出する物が多い。その草紙のうちには之を今少しく薄く漉いたものでよく印刷用に供せられてゐる類のものがある。これは自分がこれ迄各省各地で實地に見た支那民衆用の印刷紙のうちで最も悪質のひどい紙である。ところで先年自分が三峽を越えて萬縣、涪州、長壽、重慶と過ぎ行き更に遡江して叙州岷江方面へ向かつてゐるときのことである。ホウキヤン（合江）から瀘州、江安あたりの各船着きの田舎町を散策してゐたところが路傍の露店でかうしたひどい最も粗末な紙で木版刷りになつてゐる俗本、紅本黄表紙類の幾種類かを瞥見し之を手に入れたのである。

四川の片田舎で上海から云ふと先づざつと遡江一千五百哩もあるその奥地であるのだからかなりひどい天地であることは云ふまでもないがその古の巴蜀の秘境だけに現代ばなれのしてゐる所

風俗・趣味

大支那大系

が多く何となく自分共支那の民衆研究に興味を持つものには却つて興味津々たるもののあるのを覺えた。路傍ホワンコウシュ(黄葛樹)老木綠蔭には佛手柑を山積みにした露店なども出て居たり、又そのあたりの古廟を見ると何れも四川の士兵に占領せられて何となく殺伐の空氣の漲つてゐると云つた物凄氣持ちのしてゐた處であつた。さればその邊の山村にしろ町にしろ、長江の下流方面の進んだ文化の及んでゐる處の少ないのは固よりのこと、重慶、成都あたりの文明の影響もさまで及んでゐるやうには見えてゐなかつた感じもする。その江岸に沿うて建ち並ぶ民家の建築振りがらして、山の溪谷に沿うて墓の櫛比せる様子を見渡しても何となく四川獨特のスタイルによつて巴山の背景に調和した感じを見せてゐるやうに思はれてならなかつた。

四川の奥地は既に天下の絶域三峽を越えてゐると云ふことだけでも、普通の僻陬の地とは趣を異にせるわけであるが、それも大體重慶まで一段落で重慶を限度となしてゐる。巴縣重慶を越ればそれからかみは峨眉の路にしろ屏山縣から西藏打箭爐に向ふ路にしろ山川風土の有様がすべて極めて世と懸絶せる感じのする處のみである。従つて途上に見る處の山容水態の自然の景色にしろ又風物文化の現はれかたにしろ亦大いに原始的に近い古趣に富みたるものが多いかのやうに思はれてならぬ。今こゝに紹介せんとする四川上流地域に入手したる俗本の流布本はこれがもとその最も俗

風俗・趣味

の俗なるものと云ふ關係もあるのであらうが、本當に幼稚な原始的の製本振りを見せてゐるので却つて可愛げがあるやうな氣もするのである。先づそれらの紅本黄表紙で目に映じたものと云ふと有名なる「一見哈哈笑」の増補本一名笑林廣記と云ふものであるが、これは支那の士君子、紳士淑女たちの間には齡することのできないものと相場をきめられてゐるものである。ところが四川で自分の見たと云ふものは瀘州の瀘文堂の梓行に係るものでその内容は九篇より成る。即ち、

- 一、第一笑談
- 二、古今笑話
- 三、實有情趣
- 四、有笑有文
- 五、看者解愁
- 六、家常笑談
- 七、笑者有益
- 八、實在好笑
- 九、笑談樂趣

新增一見哈哈笑  
(林 廣記)  
四川瀘州本

その他その黄表紙類のうちには尙、

支那民衆奇習

大支那大系

- 一、後八仙圖
  - 二、征東靈山
  - 三、呂洞賓作詩其他
- 後八仙圖三篇  
壹佰四拾冊中  
四川西川榮興堂梓行

があつたり、又洪金山樵子口と云へるもので、四川重慶萬卷閣の梓行に係るものなどもある。これらの小冊子の製本は表紙としては紅なら紅、黄なら黄、青なら青と云つた色紙を用ひてゐるのであるが本文のそれよりも薄い紙質を使つてゐる。おまけにその表の最初の表紙を附してゐるのみで最後のうしろの表紙はすべて之を省略してゐるのである。しかもその綴ぢかたに就いては更に振つたやり方をしてゐる。その右の上部に孔を穿ちたるはよけれども之に紙心燃りの大きなのを通してゐると云ふに止まり別に之を輪にして兩端を結ぶでもなし、又一方に止めを作つてゐると云ふでもない。唯全く突き差してあるだけのことですれでよいとされてゐる呑ん氣さ。その綴ぢかたのたよりない事は實に夥しいものである。否綴ぢてあると云ふ部類にまでも來てゐないので唯差し込んであると云ふに過ぎない。その表紙がまた糊で以つて第一頁の一隅に貼りつけられてゐるので辛うじて離れず止まつてゐると云ふ状態なのである。

かくの如きたよりない小冊子の製本振りとはとひ豆本俗書の部類にしたところで自分は未だかつ

風俗・趣味

て支那の他地方でも見たことがない。若し今日かりに一國の文化の程度がその國、その地方の製本の完不完の程度如何で以つて律し得らるゝものと云ふ事が認めらるゝならば四川西藏寄りのこの方面の片田舎は最も低級な半開の地であると云ふことが云ひ得らるゝかも知れぬ。而してその當に製本振りの幼稚であるのみであるのみならず、その文字の書體そのものが又最も卑俗なる略字の連續見たやうなもので出來、その文字と云ふ文字には随分ひどい略字が書かれてゐる。とてもそれはよほどその地方の用字に、慣れてゐるものでなくては判らないものゝみである。その二三の例をこゝに示して見ると、

怡……始 奴……奴 歡……勸  
 嘆……嘆 貢……賢 還……還  
 羅……羅 叻……爺 孫……孫

と云つたのはその一斑である。製本も製本だがその文字も文字である。誠によく調和してゐると云ひ得る。四川の田舎はまだこれだけの文字でも書けたり讀めたりすることの出來るものはよほどよい方である。全然文字のない手合ひが全人口の八九割を占めてゐると云はれてゐる。支那のことだから支那全土の文化の如何に低いかはこれで略推測するに足りるのである。日本人はとかく大連

大支那大系

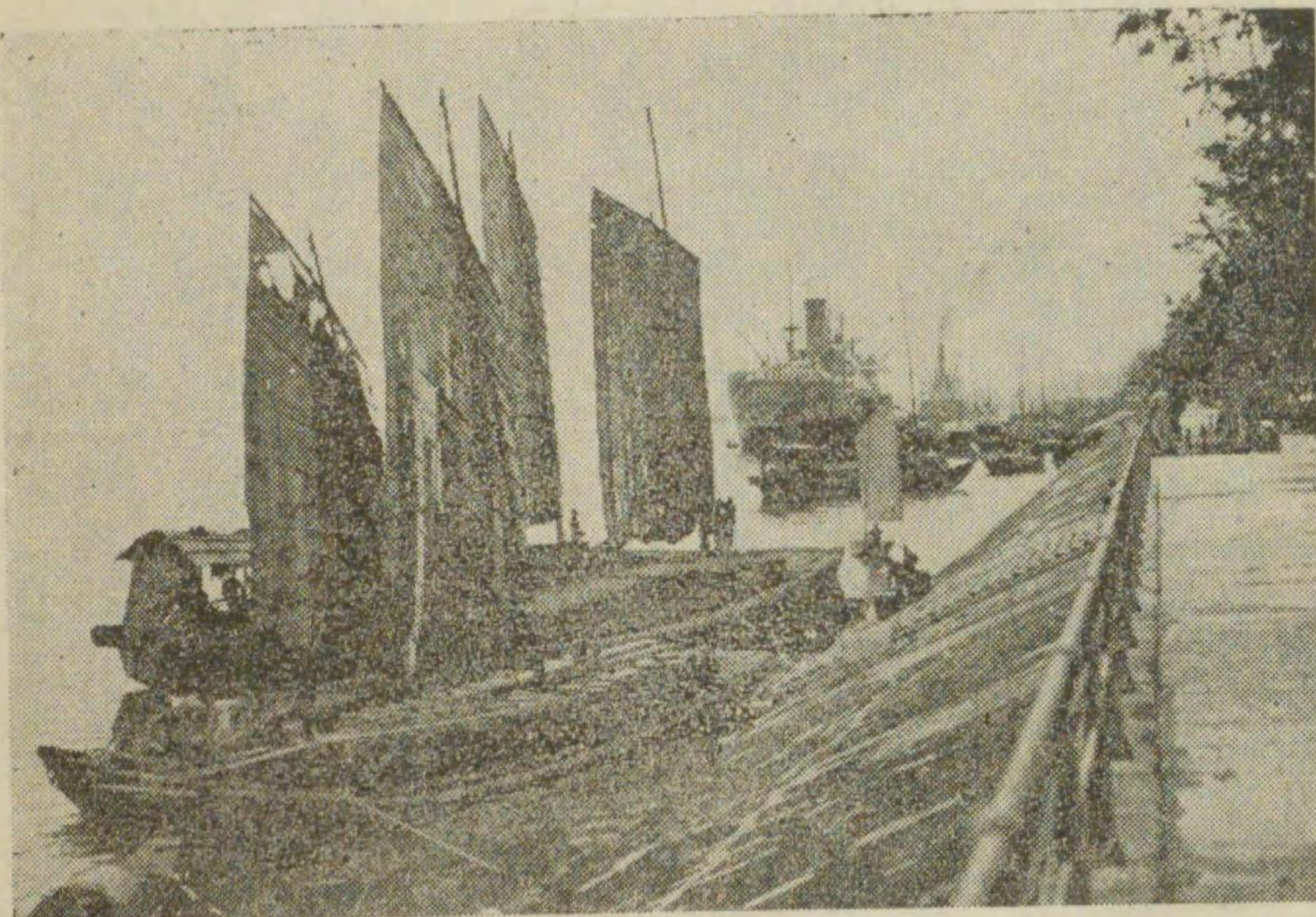
や奉天、北平、天津、上海、漢口とよい都會に見えた支那をのみ見てゐて本當の赤裸々の支那の情態は見てゐない。田舎の支那なんか見ようもしない、傾がある。しかしこの方面に眼をつけて見たら随分案外な奇習を發見することは云ふまでもない事である。

百十四 阿片公賣

阿片は支那領土内で棺柩に秘藏せられたまゝ密輸送をせられてゐたり或は又田舎の税關を遁れるため菰に包んだまゝ江上を流すと云ふ芝居をやつて見たり、又時には印度方面から來る大きな棉花のカーゴの中にも秘藏せられてあつたと云つたやうな随分色々のことがそれからそれへと傳へられてゐる。何れも煙の生ずるところ火ありて、必ずしも根のない話ばかりでもないらしい。

こゝに紹介せんとする阿片の公賣の如きは自分が實地に四川省内を旅行中親しくその現場を目撃した光景を本にして述べるのである。固より法律にどうか國の體面にどうか云ふことには關係なく支那の民衆大衆そのもの嗜好品として到底避くべからざるものとなつてゐる實際上の事を物語らんとするに外ならないのである。法を犯すとか犯さぬとか云ふ理屈は阿片と云ふ大嗜好品から云ふと殆んど問題にはならない。支那の民衆は全然法律にどうあらうと又拒毒會が何を決議してゐ

風俗・趣味



湖北省漢口舊租界地に見るドン船着き場光景

支那民衆奇習

ようが、青年輩が之を何と云はうがすべてが問題から超越して純な心持ちから之を愛用してゐるのであることは異存はあるまい。こゝまで來てゐる處に阿片の阿片として有する魅力がある。多少なり之を支那旅行中に口にした體驗のある自分どもからすると人一倍支那人心理の真相にも觸れてその言をなし得るやうな心持ちもしてならぬのである。

四川省は峽中に入りあの生死のさかひを行くと云つた洩灘からして各所各峽の急流激湍、巨渦怒濤の間を突破して遡江して上つて行くときは誰れしも人生の最も大なるクライマックスを通過してゐるやうな感じがしてならぬ。まさかすべての人が生別死別のさかひを突破してゐる如く強く感ず

大支那大系

るわけでもあるまいが、しかし輪船の乗客（支那客）どものうち自分の見る處では峽中を遡江する  
ときくらゐその乗客の統船房船戸船に於いて阿片を多く吸ふてゐる者を見たことがない。若し杯  
を擧げると同じ意味に見ても之を嗜なみ之で先づ氣分を陽氣にし又その突破を祝ふ意味から之を吸  
ふと云ふのであるなら、それは決して無意味とはしないのである。況してその吸煙の目的がそれ以  
上各種の効果を來たし得る魅力を有してゐるものであるからには一層その之に耽溺するものゝ多き  
は疑ひの餘地はないのである。自分はこゝになるだけ善意に之を解しておきたいと思ふとの事を附  
言しておくのである。

四川の上流通ひの輪船にてはまさか日本客にはそのやうな者は見ないが支那客にありてはまゝ船  
室中で露骨にその阿片に耽つてゐるのみならず之が入手に思ひを馳せてゐるものさへある。或は自  
分自らが之を購入することをしないまでも船のボーイをして買ひ求めしむるとか、色々の方法をつ  
くしてゐる船の買辦（コンプラドール）もその間の消息は百も知り盡してゐて、まさかそれに對し  
てどうと云ふ注意を與へるわけにもいかならしい。どちらかと云へば自分自らも何と云ふかしてやり  
たいと云ふ同じ穴のむじなの方なのである。かくて峽中に入つて以來巫山夔府を始め、各所の船着  
き場に船を停め又は泊するの段取りとなるや否やその心してゐるものは之を一日千秋の思ひで待ち

風俗・趣味

遠ほく思つてゐる。船着き場の方でも心得たもの、小舟を以つて豫めその水上に漕ぎ出て流浪の  
急なるをも物かはと腕によりをかけて阿片膏の粘り直しまでやつて舟を出し江心に漕ぎながら待受  
けてゐると云ふ緊張した場面を演じてゐるのである。峽中の船着きでこの輪船の客込當て込んで阿  
片を賣付けようとすする小舟を見るのは興味のある小景である。船のサイドには外の物賣りと舳艫相  
並んで忙はしげに阿片舟が公然とやつて來る。輪船のデッキの上から見おろせばよく判る處で公々  
然大きな鍋を火にかけて阿片膏を粘つてゐる様子もよく見えてゐる。これは賈客の爲めには少な  
らず挑發的になる譯であるが、又それを見越してわざと見られるやうな處でやらせて船頭が自ら買  
手と呼んでゐるやうにも見える。あの流れの速いへたをすればすぐ舟綱から抜けて峽流の渦巻の中  
へ持つて行かれてしまふと云ふ恐ろしい虎口の上でかゝる際どい藝當をやつてゐるとは誠に支那で  
なくては見られぬ奇習である。恐らく阿片の賣込みかたにも各省各地随分危険を侵してやつてゐる  
やり方もあるやうだが四川峽中のかうした商ひ振りくらゐ恐ろしいものは見ない。こゝは又格別で  
他の處で絶えて見ないのである。その背景と云ひ、その賣り方と云ひ又その買ひ手の様子と云ひ三  
拍子揃つた珍光景であると云へるのである。

支那民衆奇習



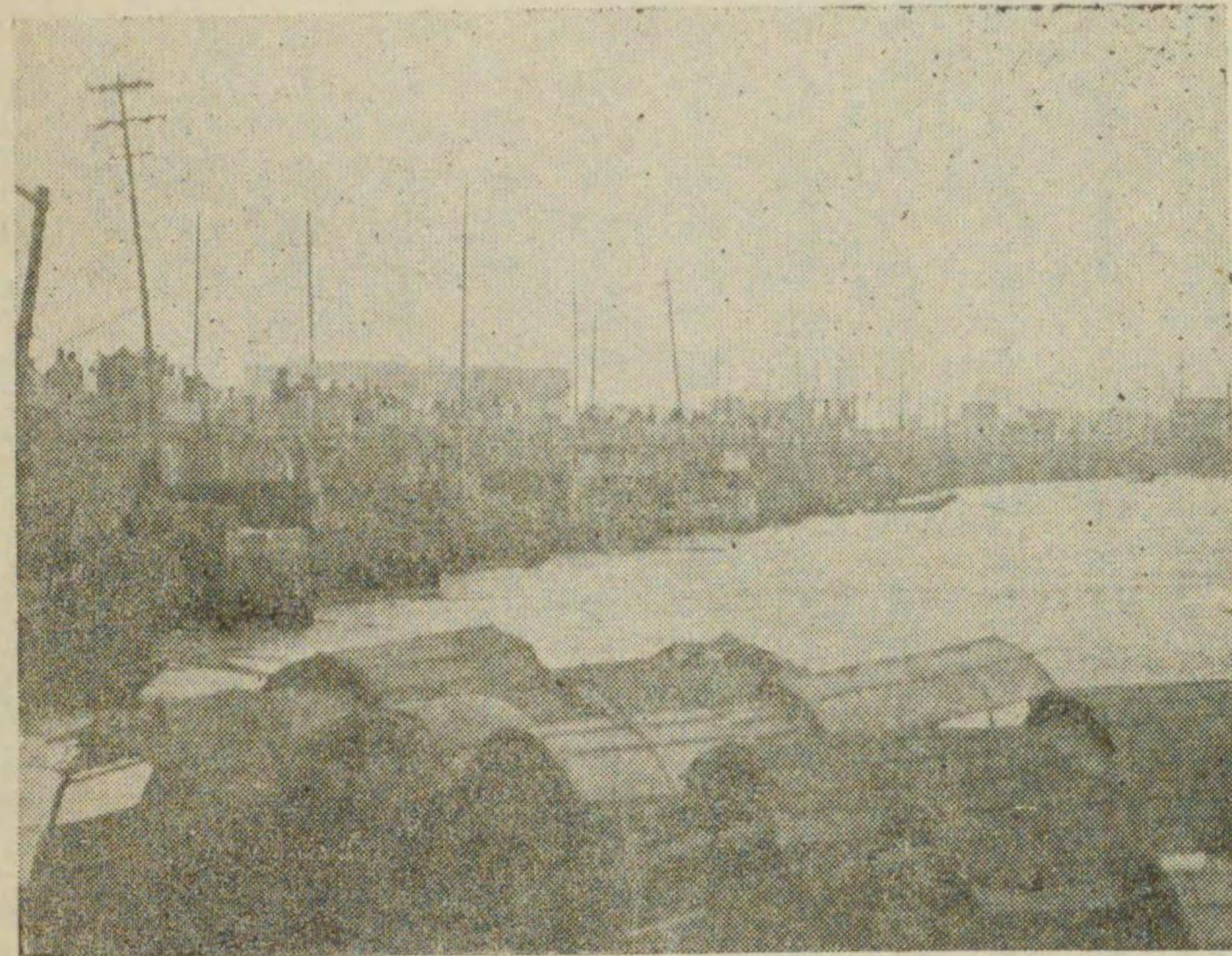
大支那系

意味でやるのであるなら未だ外にいくらでも方法もあり、飲むものもあるであらう。まさかかゝる祝杯の流儀に考へてやつてゐるわけでもないらしい。又官憲にしてもまんざらそれが氣づいてゐないでもないらしい。多分知つてはゐてもそれに知らぬ振りをして看道がしてやつてゐるその爲めにそれに向つて賣上げの幾割かは仕拂はれる事に多分なつてゐるものであらうと思はれる。勿論かかる内密の約束がなくては、公々然賣らせる特權の與へられる筈もない。かゝるこみ入りたるからくりの下に拒毒會の主趣も何も他所に之が公賣されてゐるとは民衆嗜好品の力も亦偉なるかなと云ひたくなるのである。

百十五 出稼船

植民政策の人口問題の云ふ八釜しい議論からは全然超越して支那の人々の間には唯自己の經濟發展と云ふか自己の運命開拓と云ふか、一生懸命海外に出かけて行かうとする、熱烈な考の持主がゐる。議論などするやうになつては仕舞ひで、唯純な考から、吾れも吾れもと出掛けようとするのでよいのである。そこには外人から云ふと奇異な感じのする事が色々ある。別段出稼ぎその事を奇異と云ふにはあらねども支那人の出稼ぎ情態は確かに變つた所がある。先づ第一には他の國の人々のやうにその行先きの土地の事などそれほど氣に止めないのである。

風俗・趣味



福建省福州城外南臺長橋附近の江閩、景光に集蟻る船民の情趣を示す

支那民衆奇習

- 一、唯自分の力で稼ぎさへすればそれでどうにか行けるものだと考へが強い。
- 二、資本は自分のからだと勞役そのものを全資本にしその他には殆んど何も持ち合はしてゐないか、それでどうとも思つてゐないのである。
- 三、その仕事としては何をするかと云ふに大道商ひであらうと苦力の仕事であらうと、又百姓であらうと決して選り好みなどはない。
- 四、又殆んど不死身と思はれる位總べての事に無頓着で唯出稼ぎ三味で行くのである。

大支那系

- 五、出稼ぎの地を外國だとも人の國の領土だとも思つてゐない。天下到る處自分共の活動の地であるときめてゐる。
- 六、薄い儲けでも之を根強く溜めて永年辛棒して本來の目的を果さうとする熱が強い。
- 七、集團の力の強い處へ持つて来て、個人々々の體質が又よろしい。
- 八、箆食壺漿主義とでも云はんか、極端な衣食をとり簡易生活で以つて十分満足し得る素質と習慣を持つてゐる。

かう云つたやうな條件が支那人の出稼連中に殆んど例外なく備はつてゐるのであるから、誠に都合がよろしい。従つて政府の政策がどうの、政府から補助が貰へないから出て行かないのと云つたやうな依頼心などは毛頭ない。こゝに何とも云へぬ力強い純な考へが閃めいて来る。

支那人の出稼振りに就いてとやかく批評するものもあるが、上述八條件の具備せる點を激賞するものは餘り見ない。こゝになると日本人などの生活振りの派手なことは殆んど御話にならぬ。箆食壺漿主義を實行して出かけようとするものは日本人には幾人あるであらうか。學校教育を受ければ受けるほどそれが實行がむづかしくなる。のみならず、あのデツキパセンジャーの乞食にも等しい渡航振りを見ると之を見縊らうとする傾をさへ見せる。その南洋の華僑として渡るものに對し又山

風俗・趣味

東から滿洲へ渡るものに對しその他一般の出稼船客に對して之を一種奇異なものとして見てゐるのである。如何に見縊られても何と云はれても偉いのは數の問題である。數が多い爲めに一大勢力ともなり船の方でも一等割りのよいお客であり、又上陸先の方でも支那人のデツキ・パセンジャーならば何とかなるべく片付けて呉れて、數でこなしで行けるのである。固より上陸のむづかしい處や、又禁止されてゐる處もあるにはあるが、その爲め支那から溢れ出る出稼の勢は挫かれてゐない。のみならず出先では何者も之に抗することは出来ぬ情態となつてゐる。南洋の如きは世人も知る如く今では立派な支那人の天地であり、又事實支那國土の延長として見られてゐる。かく立派に海外進展の實を擧げてゐてもかれらは氣持の上では特に海外に出かくるなど云ふ改まつた考へは持つてゐない。全く無雜作に考へてゐるのである。その主腦になるものが考へてさへゐればあとは唯引づられて行つてゐるやうなものである。華僑の南洋は生活の爲めの新天地に違ひはないが、それにして之を必ずしも新天地とは思つてゐない。どこにしても地球上到るところを自分の天地であると思ひ込んでゐるらしく、全く世話がないのである。吾人は支那人の乗つてゐる出稼船を見る度にいつもかうした感を強くさせるのである。

かやうにして支那の社會相をおしなべて考へて見ると、支那の人々のあたまでは凡そ天下の事物

大支那系

で生活の方法になるものならば、何なりと選り好みはしないと考へ、如何なる方面のこともやり通すのである。排日がいかに禁ぜられ、又反日會がどんなに開散を命ぜられても尙それが自分共の生活の手段方法になると云ふのであれば、止めたくも止められない事になる。背に腹は變へられぬそこで現にあの通り名義を國貨提唱會なり何なりに改めてそして益續行して行くと云ふ事になるのである。この邊の行き方は、火を見るよりも明かなことである。これは根絶の出来る性質のものではないのである。これに就いては云ふことも色々あるが、要するには日本側の人々がよくその宣傳とその品質、價格の攷究をやればよろしいのである。あの幾億と云ふ多數の人々の生活力とその偉大な力の現はれてゐる前には實際に於いて手段、方法、方面のことなどは云つてゐられないその奇習であればあるほど却つて好都合であるかも知れぬ。確かに支那では乞食には乞食の天地がある。常人から見れば奇習と見えてゐる事でも乞食自身にとりては却つて最も合法的で天下晴れる方法かも知れぬ。必ずしもはたから之を奇異なりとして笑ふことなく、むしろその支那人の強烈なる生活の裏を流るゝ大きな力を認めるやうにして行かなくてはならぬのである。

二十七 支那乾棗に見る奇習

百十六 琥珀密棗の神仙味

富貴を尊び、鶴壽を喜ぶの人情は世界いづれの地に行つても同じことであるが、わけても支那は古來その方面に特に文學的の洗練を経、享樂的趣味を有し又その間の氣分を表現する上に巧みな文字を發達させてゐるので苟しくも、その文字あるの士は誰れでも一種云ふ可からざる富貴長樂と延年益壽の情緒に共鳴しないものはないのである。

自分どもが支那に行つて支那町の城内界隈を歩いてゐる際、何と云ふこともなく家々を注意してゐると時折りその民家に出度い老壽を祝へる催しごとのあるうちを見出すことがある。そのうちには門扉に紅紙を細長く一對左右に同じ體裁に掲げ之に金文字の正楷で以つて美しく陽氣さうに書かれてゐるのを見るのである。すると、いつも習慣で自分は暫し立停まつて之を讀ますにはゐられないのである。その文字は例へば仙は蟠桃を賜ひ、人上壽を歌ふ。國は、鳩杖を尊び、天、稀齡を與ふとある。その實物は原文で

支那乾棗に見る奇習

風俗・趣味



大支那大系

仙賜蟠桃人歌上壽、  
國尊鳩杖天與稀齡、

など、あるのである。その仙人が蟠桃を賜はると云ふは丁度、昔、漢の世に西王母が武帝に桃を獻じて不老長壽の縁喜を祝つたのと同じことでも桃そのものが永壽無疆の喜びを吾人に連想せしめてゐるのである。

いづれその八十歳とか、九十歳乃至百歳とか云ふ不老長生の壽筵の開かれてゐる家庭では必ずや親戚故舊からも、相當その立派な壽賀のトイリエン（對聯）と云ふものを贈つてゐるのである。そして之を受けた家では賀筵の室の壁に高く掲げ賀客の目によく觸れるやうに展覽に便しておくのである。曰く、蓬萊の磬は進む、長生の果、玳瑁の筵は開く、百歳の觴とある。之を原文で示すと云ふと、

百歳の賀聯

蓬萊磬進長生果  
玳瑁筵開百歲觴

とあるのである。その長生果とあるは一に又長生菓ともあることがあり矢張り一種の不老長生の意味を現はした果實を示してゐるのであると見られる。



鹿牡、藥靈の壽長老不々るは行に舍田の那支  
歳百公周とのもためたかし乾の壽陽ち即鞭の  
酒貳蛤に並酒

のやうに考へられて來るまでになるのである。この點に於いて昔からよく云ふ、桃であるとか棗で

支那乾棗に見る奇習

あるとか云ふ果物は殊にその方面の目的に向かつてはよほど貢献してゐる所がある。現に棗の如きは、昔から、その之を乾棗にして用ひるときは、からだの血分の補薬として又人間の氣力を益すところの効能のあるものとして、文献の上にもひどく力を入れて記されてゐるのである。これは本草學の上でかなり明白に信ぜられてゐるのであるが、又廣く支那あたりの俗間信仰の上にも或る程度まで、たしかなものとしてかたく信ぜられてゐるのである。

そのうちでも江南地方の俗説では棗の實など、云ふと道教的の思想の結付いた、興味深い材料として考へられてゐるのであるが、自分は平素持に此棗の演説に就いては注意を成りたけ怠らないやうにしてゐるのである。と云ふのは、その棗の傳説の典故に就いては未だ詳かにしてはゐないのであるが、支那の俗間信する所の説に據れば下に述べる如き不可思議なる不老不死の効能を有する棗があると稱せられてゐるのである。

その不老不死の秘約とされてゐる棗は、その樹を栽培するに約三千年もかゝり、それに花を咲かせるには又三千年、それからその實を結ばせるに更に又三千年を要する。つまり實がなるまでには總體で九千年からの長年月を要する勘定になるのであると云ふやうに考へられてゐるのである。されば棗實そのものが不老不死とか不老長壽とかの靈約に見られ貴重品視され、神聖視されてゐる

のも満更らではないのである。それもすべての棗に果してかゝる傳説の結付いてゐるか否かは明でないが支那各地ともその棗についての傳説奇習は實に枚擧に違ない位澤山あるのである。わけて支那四百餘州の中で棗の名所と云はれてゐるところは次の三省である。

- 一、安徽省の棗……………南方支那
- 二、山西省の棗……………北方支那
- 三、山東省の棗……………東方支那

が南北での屈指の本場と稱せられてゐるのである。その事實兩省共實地に之を踏査して見るとその評判に違はず、見事な大粒のものが出来てゐる。殊に山西の如きは太原から晉祠あたりにかけては、合抱以上の老棗が並木をなしてゐると云ふくらゐに盛なものがあるのであつて、又ぼつりぼつりと田畑の間に輪廓の見事に圓く生ひ茂つてゐる景色を見るのである。そして、その棗の實はその色が淡緑色より黄色に熟し、秋の仲秋節頃になると例の褐色を帯びて、立派に染まつて來るのである。所謂「琥珀密棗」とはかやうに色の着いて來たものを指して云ふのである。又山東は樂陵のなつめはたねがないので有名である。

かやうに棗は安徽、山西の産を以つて四百餘州中最優最大のものとなしてゐるが、尙浙江省の奥

支那乾棗に見る奇習



支那大系

地蘭溪あたりでも近來その栽培の盛にして、上海あたりへもかなり多く賣り出してある關係上相  
當に宣傳が利いてゐるものもこの頃だん／＼出來て來たやうである。

總じてかゝる見事な琥珀色の大棗と云ふものは見るからに、垂涎三尺で全く一種強烈なる魅力を  
有し、又之に神仙的の色つやも添へられてゐるかのやうな氣持もするのである。たゞにその氣持  
がするばかりではなく、全く之が美味の他の珍果に卓越してゐることは誰しも異存のないところ  
であると云つてもよろしいのである。

支那古老の間では、そのたとひ傳説的の話にもせよ、之を不老不死とか又は不老長壽のシンボル  
として用ひらるゝものが多い。そのわけは恐らく古來何かに就けて桃が若返り法のシンボルとして  
役に立てられてゐるのとは違つてゐる。と云ふのは棗の方は桃と其の形も違つてゐるし、その形が  
ら來る聯想などよりもつと深刻なものを有してゐる所があるやうにも考へられる。或は本來の根  
源にまで遡つて考へるときは同じことになるかも知れぬが、しかし棗の方は、その功成り名遂げ  
た高貴の老人どもが莫迦にその利用の方法について、苦心をかさね、そしてその結果はおのづから  
立派な若返り法の形をとつて當人たちが悦に入つてゐる、情態を各地で見出すのであるから、左に  
その一端を支那俗間に見る奇習の異例として紹介して見たいと思ふのである。

百十七 若返り法に適用せられた神仙棗

自分は最近の夏季であつた。浙江は寧波方面へ遊歴を試みんと上海に立寄り北平路の精進料理で  
有名な長康里功德林のスウツアイ(素菜)の饗應にあづかつたのである。功德林と云ふと寧波の碼頭  
にもその素菜の菜館として評判の料理店があるが、江南の縉紳間にその名も知られたる、王一亭白  
龍山人の力添へにて營まれてゐる店である。それだけに他の素菜館よりも際立つてうまくなべさせ  
てゐるので、自分共もいつも江南に遊ぶときは此の菜館に立寄るを無上の樂としてゐるのである。  
ところで當日は陸炳文君の見立つた獻立で、大分珍料理が卓上に運ばれたのであつたが、その主  
要なるものを列記して見ると順序不同であるが、先づざつと次のやうなものであつた。

功德林菜單

- 一、黃耳蘆筍湯
- 二、炸荷包蛋
- 三、炒包魚
- 四、掛爐燻鷺

支那乾棗に見る奇習

大支那系

- 五、清燉良耳（良耳は銀耳即ち四川省産白木耳のこと）
  - 六、沙冬菇
  - 七、燒黃雀
  - 八、清燉虎早笋
  - 九、紅燒笋（紅燒魚の類の調理法）
  - 十、西湖屯菜湯（純菜）
- 水果 四掃盆 眞心兩道

（上海弗八元）

このうち四の燉鷺は名稱の上では、精進料理らしくない臭がするやうであるが、その實油葉を材料に用ひて王義之の蘭亭に因んだ鷺鳥の形を作つたるものである。どこまでも、その素菜たることは云ふ迄もないのである。白龍山人の家庭梓園で作らるゝ精進には一層凝つたものもあるが、しかし功德林の調理は浙江、天童、育王兩禪寺のそれにも劣らぬ、うまい精進料理として通人の間では賞讃されてゐるのである。

精進料理のあとで自分はよく乾棗を要求することもあるが當日は、既に何もかも十分であつたので別に之を求めもしなかつた。が、しかし宴酬にして紹興酒の乾杯が始まる。主人役の南洋財紳だちも下戸ではあつたがかなりきこしめし佳話珍談は益蔗境に入り快談に花が咲くのである。それも日本料理や洋式料理のときであると不似合であるが、支那料理であればおきまりで、必ずきつと出る幕が来る。又出た方が支那料理の濃婉な加減によく調和するわけでもある。そこで誰れ云ふともなく濃婉な話題に話の中心が向いて行つて、珍談はいよゝ本筋の舞臺に這入つたのである。そのとき主客馬力をかけて百尺竿頭一步を進め、神仙棗の不老長壽から若返り法の話の方へと話題が進んで来た。その間質問、應答入り亂れてかなり濃やかな際どいところまでも行つたが、すべて抜きにそこには唯支那上流家庭の奇習のうちで不思議な罪のないことで、而かも人間自然の願望を充たさんとする思ひから、これほどまでに思ひ切つた赤裸々のことも行はれるものである哉と、たゞたゞ讚歎せしめられたのみであるが、こゝにはそのことに就き見聞のまゝを紹介しておきたいのである。

風俗・趣味

神仙乾棗に就いては滿洲にてかつて、自分が遊歴中のこと見聞したことがある。と云ふのは凡そ此の世に功成り名遂げた富豪の老翁隱居だちにして、既に財寶の慾望も十分に満たされたし、名譽も十分に得られたし家庭に於ける幸福に至つては十二分に恵まれてゐるといふ工夫で、何一つに此

支那乾棗に見る奇習

の世に不自由を感じてはゐないと云ふ。かう云つた、吉星高く照らす平安の宅に就いて見ると云ふと、その毎日の享樂生活に耽耽つてゐる老翁だけは、唯一つだけその衷心に人知れぬ惱みを抱いてゐるのである。よく富豪の老人だちに會つて見るとその門扉に、七重の寶樹、金界を圍り 一片の氷心、玉壺に在り。

七重寶樹圍金界

一片氷心在玉壺

など、立派な門聯の句を見るのである。句としては見事で禪林書屋の柱楹などによく見る句である。かなり悟つた人の口誦する語であるやうに思はるゝが事實は争へないのは人間としての慾望である。料理の芬香かんばしい皿と云ふ皿には何れも箸をつけながら、話題を轉じてその乾棗の珍談を出して見る。すると蟻の甘きにつくが如く誰れもかれもその方面に就いての打明け話懺悔話が續出するのである。中には北方支那の分限者の珍談が出る。巨萬の富を積んでゐる老翁がしきりとこの神仙棗の琥珀色に熱してゐるものを熱望し之を口中に入れてさも愉快さうにモゴ／＼しやぶつてゐたと云ふやうな目出度い話も出る。ところで此の棗には特別珍話が伴つてゐるのである。餘り人の前では話にくい隠れた珍談秘話も潜在してゐるのである。と云ふのは既に老齡七十歳、八十歳

と云ふ長壽の人だちの此の世に於ける唯一の願望は何等かの若返り法によつて、少しでも自分の氣持を若くし、又出来ることならば生理的にも若年のものと同じ弾力性のあるからだになりたいと云ふこと、これのみに考へが集中されるのである。若いものから云へば殆んど無意味のこのやうでもあるが、高年に達してゐる者の内心を察して見ると決して他人の村度を許さないものがあるのである。老翁のなすこと考へることは極めて自然であり無邪氣である。決して之を冷笑の眼を以て眺めたり評したりしてはならぬのである。

士豪の家庭にはその大家族制のとられてゐる關係上隨分家のうちには、家の子郎黨だちがたくさんゐる。けれどもその召使ひとかおこま使ひをしてゐる連中どもの中で、未だ處女であるものゝ云ひ含め例の神仙棗を幾日間か温めしむるのである。こはその棗の大小にもよりけりであるが、普通一個と限られてゐる。時には二三個と云ふ話もあるが、それは唯その話を面白くする爲めの話であつて、本當のところは一個である。その一個を身體の或る部分に挿入して十分よく濕はしめ、そのアルカリ性の性分も十分に吸収せしめ果ては、その何となくふやけて來るまでも念入りに入れておかせるのである。話によるとそのとき大切な用向をしてゐるのであるから、處女はあまり家のうちや庭先まはりを歩くかせないやうにしてゐることである。又當人だちもその要領を心得て





大支那系

ゐてあまり蜚んだり跳ねたりすることをしない。後生大事とそれを保持しひたすら之を温めてゐることさながら牝雞の雛を大事に擁してゐる以上であるのである。

かくて老翁の肝煎であり見方によつては命よりも大事なものとしてされてゐる一粒の乾棗は、その乙女のみづ／＼しき氣を受けその精氣の發洩たるものを、そつくり全部その乾棗の實に吸収せしむるのであるから、その爲めに硬く乾いてゐた棗實もふやけて來て一種の濕ひを得るに至るのである。そして場所が場所だけに一種の芬香さへ之に加はりその芳ばしき精氣によつて云ふべからざる年少者の電氣を感じるものとして考へられてゐる。その果して實物が物理的に又生理的にどれだけの効能を現はして來るものかは別として、心理的には確かにたく信ずることが出来るのである。既にこゝまで來るとその普通一般常識者の判斷や見解を以て之を評し立ることは出来ない。主觀的にただその常人から見ても精氣を得る有効な方法であると迷信にもせよ固く信じ込んで了つてゐれば、それをばたから何と評することも出来ないのである。

思ふに世の若返り法とも云ふものは、とかくすべての常識の判斷を超越し、むしろ無我の状態なることを以つて極致となしてゐるものゝ如くであるから、それが風儀上にとかくの噂を生じやうとも、そんなことを氣にするやうなことなく、八十九と云ふ老境に達してゐる鶴叟連中のことなれば、如何なるいたづら事も寧ろ愛嬌とこそなれ、向きになつて怒りを買ふやうなことだけはない位のものである。又若年のものも唯之を同性の目を以つて眺むる丈であると云つた風に強ひて之を嘖ふやうなこともしないのである。金持ちの隠居がかくの如きことをしてまで尙その永壽長久、不老不死ならんことに腐心してゐるのは同情に價する。乙女の精氣を得たるふやけた棗が生理的に云つて果して特効のあるものかどうかは暫くおいて云はず、たゞ理屈なしに之を受けて老翁が之を自己の口中に入れ朝夕離すことなく、之を舌上に弄び載つけて、しやぶつてゐることそれ自身が無上の快味を覚えるものらしいのである。

老翁がと云ふ老翁が他にもつと何とか云ふ方法もあらうに風の變つた人にも云はれぬかゝる方法による棗をば自ら好んが四六時中口中にすると云ふことは老翁自らの何よりの若返法と考へられてゐるだけに又その氣分も燃えてゐるところがある。その目的のためには當人はあらゆる手段方法を嫌はない。さう云つた氣持ちでゐるため老翁はその間だけでも春秋に富む少年の氣持ちを感電することが出來ると言つて、その氣分に満足してゐるわけである。

支那の世俗、その卑俗なる道教の寺や佛寺などに行つて見ると云ふと、往々、需むるあらば必ず應ず。

風俗・趣味

系大那支大

有需必應。  
有求必應。

の文字を讀むことがある。この類の何でもござれ式の神佛に對しては必ずや參詣人も多く祈願をかくるものも踵を接してゐるの盛況を呈してゐるのである。關老爺にせよ、老君廟にせよ、又財神廟にせよ、ニヤン／＼ミヤウ（娘々廟）にせよ、かう云つた寺廟にはよく此の、需むるあれば必ず應ず式の扁額を見ることがある。しかし老爺だちの眞の願ひは、こうした廟宇に祈願をこめることだけでは満足が出来ぬ。今少しく直接に十分に感覺に訴へて感電するところまで行かなくては意に充たないのである。しかしこゝに述べた棗の方法は普通有りふれた棗の食べかたの中で一等進んだややかたであつて、多くの支那の老境にあるものは大抵之を心得てゐるのである。又傳説口碑の上にも色々之に關聯したものが残つてゐるのである。

然かしこゝに注意しなくてはならぬのは、第一その乙女處女の選びかた嚴選の問題である。若しもそれが乙女と云ふは名のみであつて、乙女に非ず専門のテキニツクで云ふと尖先生（小と大とで出來た文字即ち上の方の顔は小人でまだ子供のやうであつても下の方は大人の一人前と云ふ義で出來てゐる隠語である）と云つたやうな部類のものであつた場合などのことを考へて見ると頗る感心

味趣・俗風

しないことが續出するのである。ところで第一その乙女でないものには棗は一切托されないことになつてゐるのである。第二その處女でないものに托した場合にはその棗は特効どころの騒ぎでなく反つて毒になるから迂つかり使用が出来ぬと云ふことになつてゐるのである。第三愛の心が老翁に感電して來ないわけになるからおのづから、之れが妨になるのである。されば、支那富豪の老翁はその自己の心得てゐる範圍内にて、その眼鏡に叶つた乙女を選ぶと云ふことに重きをおくと云ふことである。老翁の若返り法に就いて老人自身が試むる、秘法はまだ色の場合がそこにあるが、この棗の方法は最も廣く普及してゐる方法であつて、何れの地方に行つても了解されてゐる事柄なのである。

湖南湖北殊に洞庭湖の附近から、長江蘇浙江あたりにかけ、又北平から滿洲奉天あたりへと、どの地方に行つても知つてゐる人はよく之を知つてゐる。それ故場合次第ではたゞ棗の話や不老長生の談柄のつもりでなく出して見ても期せずして一座、笑つて答へすと云つたくらゐに諒解があり、又中には變り者は滔々とその老人に代つてその方面の説明に及ぶものもあると云ふ工合であるのである。

功德林の精進料理の席上棗の奇習に就いての話は大要以上の如くであつたが、しかしこれは自

支那乾棗に見る奇習



大支那系

分が他の地方にて見聞してゐる事實を裏書きされたやうな感じがして一層確實性が増したやうな氣持がする。

百十八 棗の並木を作る美風

以上の如く、こゝに棗の話を通じて來たものゝ、一體若返り法に乾棗の用ひらるゝことは支那では奇習と云ふほどに見られてゐない位、あたり前のことゝして考へられてゐるのである。しかし事實上支那の食べ物の中にはその補身劑として又壯陽劑として或は若返り乃至は不老長生劑としてかなり廣汎に亘つて卑近なものが俗間に使用されてゐる。こゝにその主要なるものを列記して見る  
本草の上にて壯陽補身、不老長生の特効ありとせらるゝものゝ數々

- 一、乾 棗
- 二、杏 仁(杏仁湯となしたるものを賞味す)
- 三、白 木 耳(パイルムル、銀耳とも云ふ、四川産)
- 四、冬蟲夏草(爐虫草とも云ふ、西藏産)
- 五、燕 窩(南洋産のものを優良となす)

六、人 參(高麗産を良品なりと傳ふ)

七、三蛇膽酒(廣東産)

八、虎 骨 酒(廣東産)

これらは大抵その原産地に就いて自分自らその實際をその土地に行つて踏査して見たのであるが何れも、支那人以外のものゝ目には奇習ならざるはない。その冬蟲夏草の如きは根が虫で莖が植物と云つたやうな不可思議千萬の葯草であり、又三蛇膽酒は實際蛇を溶解させて醸した蛇酒なので、自分も之をその土地に行つて飲んで見たのである。今その工場の実況を見た話は之をすべて省いておくが、こゝにその棗に就いてはさすが支那である。之を並木として古來栽培してゐるのであるが自分の踏査した山西省太原附近の老棗古木の實況を述べて見ようと思ふ。

風俗・趣味

太原は閻錫山配下の省城として有名なところであるが、その黄河の支流汾水を渡り晋祠から天龍山の麓にかゝる邊りまでの一帯の地には殊に棗の老樹が多く先年秋自分はその往還をあるいたのであるが、そのあたりには棗の實を繋げるもの之を棗樹より收穫して運搬せるもの、又吠畝の間にその大樹の生ひ茂れるものなど實に多くわけてもその老木の並木が晋祠と云ふところから奥地の方にかけてかなり長く續いてゐるのを見るのである。昔しの晋の故地は棗に恵まれたところでもあつた

支那乾棗に見る奇習

系大那支犬

か、今日かくも路傍に不老長生の効力のある果實を、行人に饗應してくれてゐる。その鷹揚さ加減と云ふものは嬉しく感ぜられて仕方がないのである。

固よりこの棗の並木は行人に振舞ふ爲めに植ゑられてゐるものと茲で斷ずるのも速断であるかも知れぬが、その老木と云ふ老木すべてが實に鈴成りに成つてゐるので行人は大いに叻かり、すべて大童になり石を投げて之を落とし琥珀色のその美味なるものを頼張ることが出来る、と云ふやうに恵まれてゐるのである。その粒の著しく大なるとその味の妙なるとは殆んど食欲を、いつまでも咬るに足りるものがあるのである。武陵桃源は湖南の樂郷の名稱なることは云ふを待たぬが、然しかうした太原晋祠の地方にも、又この果樹の並木を以つて一種の武陵桃源を漾はせてゐるところがあると評してもよろしいのである。けれどもその處女の囊を用ひるの奇習に就いては出西の老翁だちには之を確むるべき便宜を得なかつたので、その點に就いてはこゝに述ぶるべき何物をも有しないのである。たゞこゝにはその琥珀色の美事なものが無數に産出するので北方支那隨一のところとして、その方面に鳴つてゐる所でもあるから確實地踏査のまゝを紹介するに止めて置く次第である。

本多静六博士の直話によると世界で果樹をそのまゝ大道のプロメナードの並木に用ひてゐる所は

味趣・俗風

全くないわけではないが非常に少ないとのことであつて、餘らないと云つてもよろしいくらいである。殊に行人に自由に取らせるに任せておいて、誰れも何とも云ふものがなく、吾人旅愁の彌次は之を天恵と計り存分せしむることも出来るとは何と云ふ又鷹揚な美風を助成せしめてゐることであるかなど、山西の土民に對して感謝の辭を呈しなくてはならぬのである。その土地の氣候地味が之に適してゐるばかりでなく、さう云つた風韻のある遺風の存してゐることは何とも云へぬ奥ゆかしさを感じてゐるのである。況んやその果實そのものが壯陽、補身、勢力増進の藥となり若返り法の特効の藥ともなつてゐるのであると云ふに至つては人道に結構なことであり、又老人をいたはり之に慰安を與へる點から云つて偶然ながら貢獻するところが多いわけであらうと考へらるゝのである。

由來支那の事情と云へば北京（北平）とか上海あたりのことのみしか日本に傳はらず、遠く奥地に這入つた田舎の農村情態や、その風俗習慣のことになると殆んど日本に傳へられてはゐないのである。支那は交通の進んだところであるのか遅れてゐるところか本當のところはよく判らぬ。進んでゐるとも云へるし又おくれれてゐるとも云へる。

然かし何れにしても各地方とも奇習に富んだところであつて、その棗の實のみに就いてゞさへもかうした秘法が乙女と老人との間に行はれてゐる。此の間の消息を知つてゐて、そして花の都の乙

大支那大系

女を見、又土豪の老翁にそ知らぬ顔をして接し四方山話に打耽つて見てゐる自分は人知れぬ感慨無量のところがあるからである。

二十八 支那貨幣に伴ふ奇習

百十九 贖 札

上海はドモル（大馬路南京路）の老舗で買物の吊銭に三枚の札と幾つかのシャオヤン（小洋）、トンペイ（銅幣）を受取る。又チウチンリ（晝錦里）からンモル（五馬路）あたりでも買物をして又幾枚かの札を吊に貰ふ。そして、歸路ホナンル（河南路）の九華堂に立寄り詩箋、文房具、扇面などの買物をして、その時細かい札類を集めて勘定をしようとする。すると、その番頭はそのうちの一枚の札を頻りにじろく／＼眺め他の店のものにも見せて居るが、やがて、それが怪しいと云はぬ計りの顔付きで

「どうも此の一枚の壹圓札は受取れませぬから、お返し致します」と来る。

「だつて今その老舗で受取つた計りだが」といくら云ひ返して見ても頑として受取つてくれない。札に目印しも何もあるわけではなく、それに

支那貨幣に伴ふ奇習

大支那大系

無頓着に見さかひもなく吊銭に又吊銭をとごつちやに財布につゝき込んでゐたものであるから、どの店で貰つた札がニセであつたのであるか薩張り判らない。今更もとの店へ一々捜がして廻るわけにもならず、油断して迂つかり受取つたのが、こちらの不覺であると諦らめるの外ないのである。しかし、かう云つたことは、いつもあることであるから、その紙幣の受取れない要點だけは承知しておかなくてはならぬと云ふ考へになる。そこで

「では番頭さん、それが眞札でないと云ふのはどこが違つてゐる爲めですか」  
すると番頭は云ふ

「殆んど全くそつくりが出来ては居るが此の交通銀行の札には兩換屋を通つて來たしるしが、這入つて居ない。だからどうも怪しいのです」

と云ひながら、そばから同じ交通銀行發兌の拾圓札の本ものを出して見せてくれる。見ると、その札には周圍の飾り模様の内側四隅へ持つて行つて細楷で一字宛確かに這入つてゐる文字がある。この文字の這入つてゐると、ゐないとは大變な違ひである。成るほどその時怪しい札には這入つてゐないものだとこのことが確かめ得られたのであつた。

眞札と眞札とは支那の社會で生活をしてゐるものゝ必ず留意すべき點ではあるが、平素別に氣に

風俗・趣味

も止めず、その紙質、印刷、大いさ、手ざりから全體の感じに就いて、さうその八釜しく考へもせず無雜作に見てゐなかつた。實はそのやうなことではいけないのである。しかし物も考へようで自分自ら今すぐ眞札を研究資料として手に入れたと思つても、すぐ入手の出来るものでない。一層のこと、市中でそれを掴まされたる時を幸ひに、さうした怪しい札は材料に取つておきたくなりそれが眞札と判れば判るほど却つて自分の參考に手放したくなくなるものである。

帝國主義の下にある日本あたりで考へるときは、苟しくも貨幣の製造所とでも云へば、ちやんとした權威のある處に限定せられ、それが官憲自身で造らるか又官許の八釜しい處で監造せしむるかでなくてはならぬと思はるのである。従つて眞札の密造のことなんかは嚴重に取締られてゐるのである。ところが支那では札と云へば近來米國あたりのちやんとした印刷所に依頼して居る向きが多いが、又時には上海あたりの民間印刷工場に命じて、例へば上海商務印書館邊に持込んでゐるのを見ることもある。嘗て湖南政府からの注文とあつて多額の紙幣を同印刷工場で作つてゐるのを目撃したこともある。或は又、一時日本の東京に注文が來て丸ノ内の印刷局でやつたことなどもある。どこでやるか判らぬのである。かう云つた事實は、その間の消息を疑はせるわけでもないがおのづから眞札の拵らへらるゝ隙きを與へてゐるわけになるのではないかとも思はれる。況んや各

大支那系

省地方的に天津の札、上海の札、漢口の札、奉天の票と云つたやうなものが別々に發達してゐるしその上に又、やれ交通銀行、やれ中國銀行、やれ中南銀行、やれ何のかのといくらでもその札に種類が出來てゐる爲に、一層人をして惑はしめるわけにもなつてゐるのである。しかし、その統一のない處が支那らしく、又支那社會相の眞面目を物語つてゐるわけだとも思はれる。又事實その錢莊兩換屋等の職業の榮えて行くのも、かうした貨幣の不統一である處に大切な泉源が見出されるのであるが、この贋札の多いことは支那貨幣の銅錢、小銀貨、大洋銀の十進法に行つて居ないこと共に自分たちにとつて面白い支那社會相の研究資料になつてゐることゝ見るのである。

百二十 價の銀貨

支那の市場で流通してゐる銀貨の中には紫のスタンプの捺されてゐるものを見ることは珍らしくないが、これは日本人には珍らしく又不思議に思はれることである。わけても二十錢（小洋）銀貨に最も多く之を見るのであるが、又壹圓（大洋）の銀貨にも之を見る。天下に通用せる貨幣にかく捺印の必要を見たり、殊にどうかすると、その捺されて間もないものを受取るときなど手にべたべた紫インキの流れ付いて不快の念を起させるものがある。而かも尙支那の社會では之を寧ろ喜んで授受してゐるのである。これは如何なる處で捺印されてゐるのであるか、又如何なる必要のありてかくの如きことがされてゐるのであるか、誰しも疑問の起るところであらうと思ふ。

試みに支那町をあるいてゐると、よく見るのである。その老舗の店頭に錢に關した文字の聯のあるうちで、例へば經濟の流通は人を利し、己れを利し、財源の周轉は國を富まし家を富ますなどゝ云つた文字を見ることがあつたり、

經濟流通利人利己 財源周轉富國富家。

又玉樹瑤林春色昭らかに青錢白璧芳年を買ふなどゝ云ふ文字を見たりするのである。即ち

玉樹瑤林昭春色 青錢白璧買芳年。

味趣・俗風

かう云つた店は云はずしてチエンチョワン（錢莊）又は錢店と稱せらるゝものであることを知る。こゝで兩換その他株券の賣買などが行はれてゐる。そこに行つて見ると店のカウンターで、すぐ手軽く客の求めに應じ兩換でも何でもしてくるのである。拾圓の札をこはしてくれと云へば即座にその日の相場に照らして札なり大洋なり小銀貨なりにそして端數のかねは銅幣にして勘定をしてくれる。その間厘毛といへども苟しくもしない。ちやんと算盤をおいて珠の示す數を見せてくれる。やゝもすると日本人は自分の人格に拘はるやうな氣持ちもあり、又大抵相手を信用してゐるのでも

支那貨幣に伴ふ奇習

あらう。呉れるだけのものは、そのまゝ吟味もせず財布に入れてしまふ癖があるが、支那の人々は紳士であつても必ず厘毛に注意し八釜しい押問答をしてゐる。その光景ははたから第三者として眺めてゐるものゝ目にはかなり趣味がある。こちらには厘毛の損もないのであるから唯双方の云ひ分を氣をつけて興味深く聞いてゐるだけのことである。が支那客は小銅銀貨一枚といへども凝視して吟味することは一通りでない。銅幣の方は平素麻雀をやる時の手つきで掌中に一列に列べいくらあつても數多のそれを齒切れよく音をさせ十枚づゝ勘定してすぐ片付けてしまふのであるが、小銀貨となると、さうその安々とは濟まさない。何かそこに仔細があるらしいので興味本位に自分だちそば近く行つて見てゐるのである。かうすると云ふことがある。例へば、

一、民國十一年の年號の這入つてゐる小銀貨は質が悪いからプシン（不行）だと云つて受取らうとしないのである。

二、銀貨の面のやゝ磨滅したり皿のやうにへこんでゐたり又周圍の縁の完全でないのはいけないと云つて抗議をして來るのである。

かう云つた事情のある爲めに大きな錢莊であると事の面倒になるのを未然に防ぎ、又その店の信用を増させる爲めに一切何とも云はず、苟しくも自分の店から廻つて出た銀貨には怪しいものは一

枚もありませぬと云ふ事を最も有力に證明しようとする。そこで壹圓の大洋銀貨は固より小銀貨に至るまでも悉く之にベタ／＼と紫の判を捺させるのである。そしてその捺印は何を物語つてゐるのかと云ふと、

一、當錢莊の屋號捺印のあるものは錢の質も形も悪くはない。大いに安心して然るべしとの所謂童叟欺かすのしるしであるといふことを示してゐるのである。

二、のみならず此のスタンプのあるものにして若し御氣に召さぬものでもあるならば、いつ何時持參されても必ず即座に取換へて差上げますとの絶對信用のあることを宣傳してゐるものとも解されるのである。

政府が保證すると云ふのではなくして、かくの如く錢莊が力強き判を捺すと云ふのであるから、この間に民意は支那社會そのものを主體としてゐる心持がよく讀めるのである。

しかし、いかに商賣とは云へ、その贗物を嗅ぎ出すことの機敏なことは驚くべく速いものであつて、カウンターのの上にばら蒔かれた銀貨は幾百枚あつても、すぐそれとにらみつける。それこそ電光石火の如くに發見する。そしてよい分には隣く間に紫のスタンプをボン／＼と捺してしまふのである。かねの面を穢なくするのは日本人は勿體ない氣持ちもするが背に腹を換られぬのである。





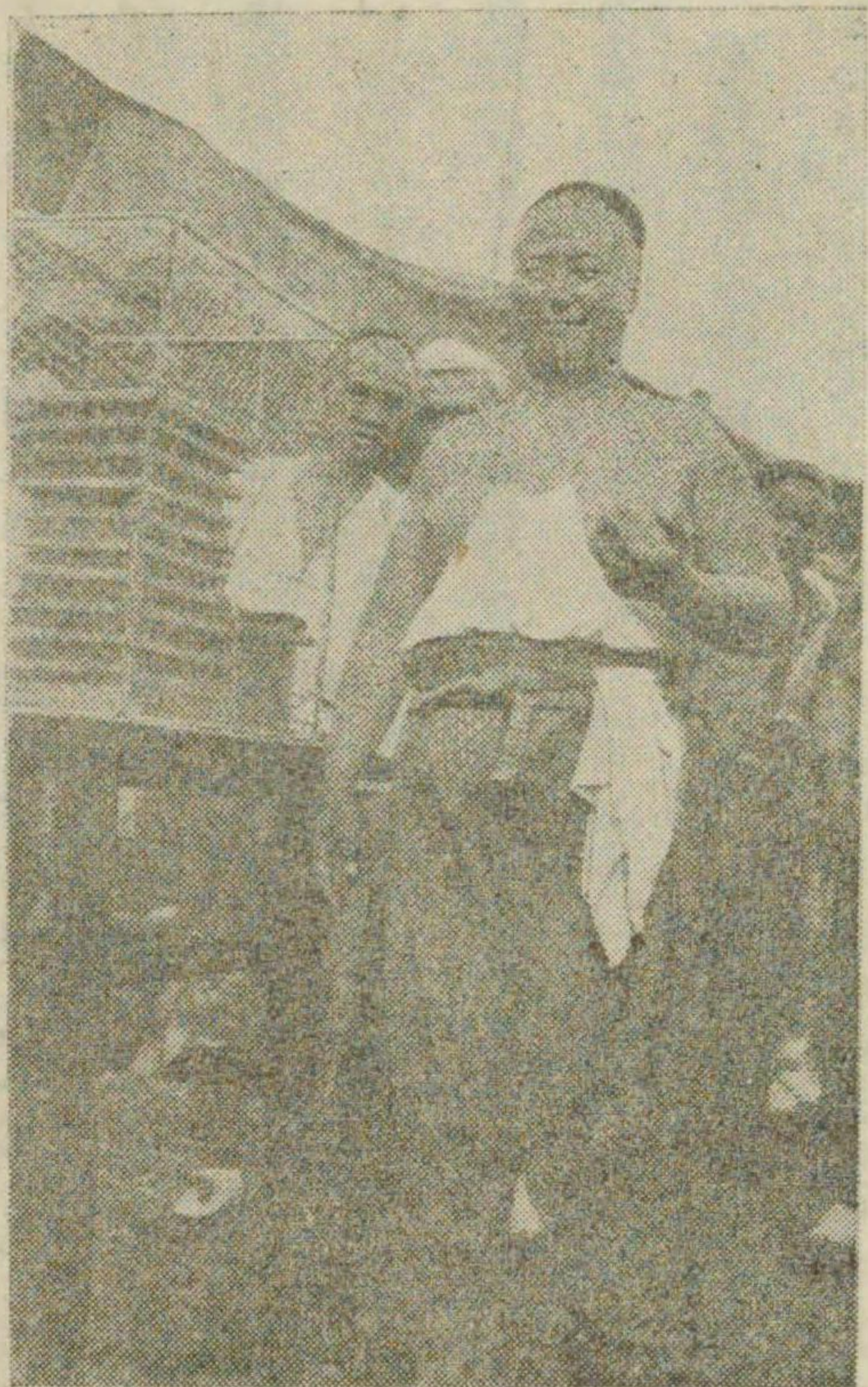
大支那系

又一般民衆もその汚れた色を綺麗薩張り拭ひ取るやうなこともせぬ。そのまゝで平氣で流通させてゐる。これは尙壹圓の紙幣などでも随分汚れてゐるのがあり、ち切れかゝつてゐるのがあり、或は中には取引關係の文字などの墨色鮮やかに記入されてゐると云ふものさへある。毛筆で大きな文字の二行も三行も書きなぐられてゐる紙幣など云ふものは日本では見ない。恐らく世界に支那だけに見る奇な現象であると思ふ。むしろ取引には使用された實證を札の面に遺してゐるわけであるから却つて新しい薩張りしたもののよりも信用があると考へられてゐるのである。札面を汚くするのは避くべきことと思はれるが支那の社會はさう云つた常識からは判斷の出來ぬものである。

百二十一 響の清き銀貨

通貨にその音響を聞かなくては安心がならぬと云ふは支那を旅行した人々の何れも奇異に感じて歸らるゝ所である。殊に支那町で買ひ物でもして壹圓銀貨を三枚五枚と支拂ふと受取る方では、先づその店頭のカウンターへ勢ひよく一枚づゝ投げ付けるやうにして、その音を吟味してゐるのを見る。譯を知らぬ人はいかにも支那の商人は不愛想であり失禮なことをすると感ずるであらうが相手は習ひ性となつてゐて、殆んど之を無意識にやつてゐるのである。

風俗・趣味



北平天平橋路の歡樂世界に見る路傍  
の銅子、店錢の兩換屋の店主振

その響の清くそして餘韻を有するものであつたならば、その銀貨は大體よろしいとされる。しかし尙その面を調べて見る。そして例の袁世凱の顔の這入つてゐるものであれば、その顔面あたりから頭部のあたりじろくゝと見る。どうかすると殆んど完全であつても一ヶ所僅か錐で突いたほどの痕迹が見えてゐても、それが缺點だと云つて受取つてくれないやうなこともある。或は周圍が正圓でないと云つて突返して來ることもある。或は、目方が少しく足りないといつて受取らぬと云ふ。始めから難癖をつけようと期待してゐるものらしく思はるゝ位によく見付け出すのである。しかし、その響きさへよろしく餘韻がチーンと快感を與へるものならば合格するのである。

銀貨の調べに最も普通にやる方法は上に述べた板の上に叩たき付けるやり方であるが、尙この外

支那貨幣に伴ふ奇習

大支那大系

に優美な方法をとるものは一枚づゝ手に取つて、それを左手の人差し指の上に軽く載せ、そして右手に一枚の大洋を持ち、その小口を以つて左手の方の銀貨の縁に打ち當てゝ見るのである。若し悪質のもの又は全然贋造された餡入りの大洋でもあるときは決してそれが清き響を出すことがないのである。むしろ鈍柔な土の如き音を出すのである。よし、それが銀のやうな音がしたとしても、その間に極めてデリケートな區別があつて、その邊の耳の鋭さに結構その價を聞き分けるだけの貴き鑑別力を持つてゐるのである。唯自分共素人の耳に贗錢の方の音はどう響くかと云ふと、その清澄の度の少ないのと、又その餘韻の引きかたの少ないのとで、略それと鑑別されるのである。若しそれ餡の這入つてゐる怪しいものであると云ふ如き場合はとても似ても似つかぬ音を發してゐるのである。

支那商人の銀貨の音に對する感じは極めて敏捷なものであつて、ひとりその銀貨の鑑別と云ふ八釜しい場合を指すのでなく唯よい加減に財囊の中で音をさせる丈でも神經が尖がり自分共の見てゐる買物の値段が折合はないときなど、面倒な押問答の代りに手許に携帶する財囊の音をチャランチャランとさせて見るだけで、既に餘程相手の心を惹き付けたことになるのである。現實に銀貨の音さへそこで耳にすると急に少々のことは欲張らずに花より團子で値段を負けて來て話が纏まる

風俗・趣味

やうなことになる。これはいつでも此の手で行くとは決まらないが、少なくとも商人の心を咬むことは事實であつて此の手で行ける場合は相當に多い。従つてこれはよく支那城内の事情に通じたものの慣用手段とするところである。甚だつまらない話題のやうではあるが、そこに彼れ等の弱點がある。そのこの機微を察することは、人情の突け込みどころである。さらばと云つて、いざ愈々それではその銀貨で品物を手しようとする段になると、そこは中々注意深いもので、その銀貨を本當に受取る先に、まづ必ず臺の上に叩きつけて見たり、又は例の通り指の上に載せて軽くチン／＼をやつて見たりするのである。

凡そ支那の商人にして否普通一般の支那人にして、その身分の如何を問はず、銀貨を受取る場合にその銀行であらうと勤め先きであらうと、その銀貨の音を見ずして不用意のまゝ受取るなどゝ云つたやうな者は一人もありはしない。それ位支那の銀貨に對しては用心をする。實は信用がないのである。近來、孫中山先生の肖像の鑄込んだものも出來てはゐるが、これなども信用のおかれてゐる筈であるが、それとても袁世凱の顔のそれ以上眉唾ものと視られてゐるものもあるのである。

百二十五 銀貨の銀粉

支那貨幣に伴ふ奇習

支那大系



支那木材商に見る挽木のき鋸の景光ふ取、上二下と互に胸にす押を要領とす

支那町ではその細工物師の處に行つて見ると紫檀なり白檀沈香なりかうした貴重な唐木香木の細工をする時分に生ずる鋸屑と云つたものは必ず溜めて取つて置き之を粗末に棄てるなど云ふことはしない。珊瑚とか琥珀、瑪瑙にしても同じことであつて、随分さう云つた貴重なものゝ粉末は叮嚀に始末されてゐるのである。道理で、そのよく支那で見

る沈香白檀の類の粘り物の珠數であるとか又珊瑚や翡翠の粘り物で出来た簪の珠とか支那帽その他の飾り物に見る圓い珠などを見るとかうした粘り物の材料たる粉末の大切にせらるゝものに思ひ比べて支那に製作さるゝ品物は中々油断のならぬものであることを深刻に感じさせらるゝのである。

支那人は習慣として人も知る如くすべて何事によらず物を粗末にしない。出来るだけ屑物でも粉末でも大切にすの美風のあることは感心させらるゝのである。路傍に蜜柑の皮一つ棄てられてゐるのを見ないのであるが、實はかうした一般人々の心懸のよいところが社會の美風をなしてゐると考へらるゝ位よく發達してゐる。それを今貨幣の上に就いて見てもその間如何にも支那らしい細かい心使ひをしてゐることが發見せらるゝのである。と云ふのは例の兩換屋あたりに就いて見るとその店の取引の終つた晩おそく店のものども銀貨と云ふ銀貨を一つの袋にまとめ入れ、袋の兩端にしかと力を入れて互に引きしやくる如く互ひに引張り合ひ中なる銀貨の揉まれ又互に磨擦しあふことによつておのづからその銀貨の縁や面を磨滅させるやうに努めてゐる。それによつて一定のところまではその重量が減じても構まな

風俗・趣味

いものらしい。又その通用し得るところの最低限度までへらさうとしてゐると云つても差支ないのである。これはよく支那人がかねの支拂ひに際して一ヶ月でも二ヶ月でも延ばせるだけ延ばし愈々ぎり／＼の日限まで納付をしないのである。學生の月謝意納の心理などに就いてもその間面白い消息を見出すのであつてその本人から打明けた處を聞いて見るとそこは銀行預金の利子の事が考へられてゐるとの事である。日歩いくらになることを勘定してゐるあたまには全くその銀貨の銀粉の考察が考へ出されずには居られないのである。之を奇習と云へば奇習であるがそれに氣付かない外人こそあたまの活きのない人間であると評されてゐるであらう。日本人は殊に物を無

支那貨幣に伴ふ奇習

大支那系

駄にすることを誇りとしてゐるやうな癖がある爲め一層かうした支那人の細かい仕振りを奇習と見る傾きがある。チヨコレートや煙草の銀紙蜜柑の皮折詰の箱何であらうと構はず、弊履の如く棄てることが紳士淑女のきまりよき風懐とも考へられてゐるのであるから、銀粉の話などは日本人のあたまには勿論意外とするところであらうと思ふ。固よりこゝには銀貨の周囲のぎざぎざを磨り減らしたり面を凹くさせるまでの細事を、こゝで奨勵せんとする意味ではない。唯その支那人のつまりいあたまが銀貨を通じて如何にその不用意の間に正直に赤裸々に現はれてゐるかを紹介しておくに過ぎぬのである。

百二十三 銀貨の秘藏

こゝには人の名とその場所とを明かす譯にはいかないが、自分の知つてゐる北平の翡翠商の某紳士は或る日自分にかう云ふことを物語つてゐた。

「自分は取引のとき仕拂ひにはなるべく紙幣の方を出して仕舞ひ、その吊銭であるとか又一般收入になるときのかねは必ず銀貨でなくては受取らぬ。あとがともかく面倒だから銀貨専門に集めて居るのである。これならばつぶしにしてもきつと物になるにきまつてゐる」云々

とその人柄の堅實であるだけに洵に石橋を叩いてあるく式のことを云つてゐるのである。そして銀行の不信用であり當てになるものでないとの事からその銀貨貯藏の方法にまでも及んでかなり珍らしい秘話が交換されたのである。曰く、

「銀貨は銀行なんか持つて行つて渡すほど不安なことではない。

それよりも自宅にてすべて秘藏するに限る。場所は詳しくは云へぬが大抵邸内に敷き詰めてある石疊みの或る何枚かをはぐつてそこへ壺に收めて入れておくのが第一である。人はよく寢臺の下とか櫃の底とか、囊中とかに入れると云ふがそれこそ一等危険である。又室にしても態々その室の一隅を選ぶものがあるが隅は却つて危険である。自分は室のドアを開いて這入つてすぐの處の石をはぐりその下を地下室として居るのである。今迄はそこが一等安全な部屋であると自分は考へてゐる」云々

風俗・趣味

嘗つて西城欄漫胡同の某名流の邸宅では矢張り一室の床の或る地點から自分共その甬道に當たる石段を下り暗室なる穹窿石窖に這入つて行つたことがある。そこには六朝佛から三代古銅器古硯その他の寶物が圍りの石の棚にまばらに陳列されてあつたのを目撃したのである。無論これらはよほどの老朋友義兄弟と云つたものでなくては見せない。普通の他人には見せるわけがないのである。

支那貨幣に伴ふ奇習

大支那系

自分は友人の劉驥業君からの紹介でかゝる秘藏書室を窺ふことが出来たので深く劉君に感謝をしてゐる次第である。そのうちは、固より商賣を営んでゐるうちではなく、もと西安府に行つて醫者を開業してゐたと云ふことを主人自ら云つてゐた。何分にもトワンプアン（端方）陶齋の遺友であるだけに随分立派な結構なものを持つてゐた。が銀貨の這入つてゐると思ほしき函などは見當らなかつた。一々燭をもつて這入つて行くのであるから一種異様の感に打たれたので、従つて自分には今尙その印象が深い。之を北京の日本人の友人だちに内々話して見たが此の種のうちに這入つたもののあるのを聞かない。いつも北京にゐるものには却つてかうした機會がないのかも知れぬ。

尙北京には伊東忠太博士の直話によると某大街の某胡同に豪華な邸宅があつてその或る室の壁は壁の如く見えてはゐるが實は押すとがらりと廻つてその室は秘密室になつてゐるとの事である。建築上どう云ふからくりで出来てゐる壁か自分もまだ實地に行つて見たわけではないので、詳細に述べることは出来ないが、少しくその眼で調べて見ると北京以外に支那の舊都には各地にこの種のものもあるらしい。又ありさうでもある。當然その必要があると云ふのは氣の毒なわけである。獨り金銀財寶と云ふもの計りでなく身體のかくれ場所遁げ路と云ふものも相當必要な場合が多いのである。又邸宅ばかりでなく、路次から路次に抜けて行く抜路などにも随分怪しげなところに迷路の

風俗・趣味

出来てゐるところがある。市區改正だとかメイン、ストリート（大街）だとか云つて見たところでは表面丈の話で支那生活にはどうしても地下室穴倉路次傳ひの抜け路と云ふものが必要缺く可からざるものとなつてゐるのである。

かゝる背景的世相の一斑を知つてゐてそして支那民家にいかに銀貨そのものゝ秘藏さるべきかに就いて心を碎いて考へて見ると實に支那人の日常と云ふものは同情に價するものである。従つて支那生活にはいくら何と云つても深刻な不安を伴つてゐるものであると云ふことが察知せらるゝのである。

百二十四 車錢の手品

北京はシーチメシ（西直門）外の植物園に出かゝるときであつた。園の門前で洋車からおりる。車賃は前以つてきめたゞけ小銀貨でやつてそしてあと二三枚の銅子兒を手渡しにする。そして售票處の方へ向かうと云ふと、車夫は大きな聲でこちらを呼び止めようとするのである。そして云ふに「旦那、旦那今のかねは十錢足りません。これ御覽なさい」と云つて掌の上に載せた小銀貨二角に三個子兒だけを本當らしく見せる。なるほど足りない。足

支那貨幣に伴ふ奇習

60  
2

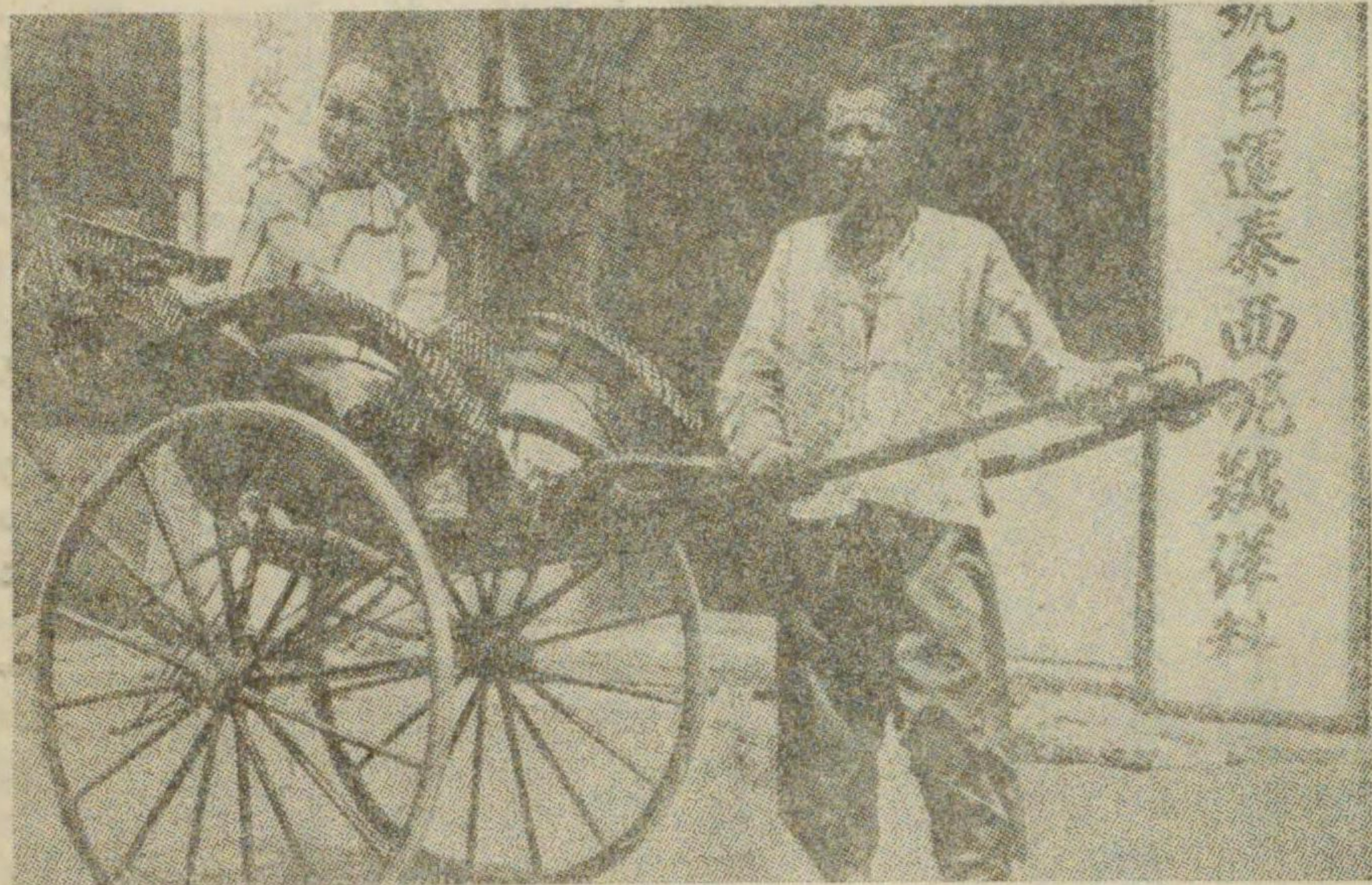
大支那系

りないが、しかしその手渡しをした時には確かに尙一枚の一角小洋を揃へて與へた筈である。そのときに足りないなら足りないといふべきである。そのとき騒がないことはない筈である。こちらでも不足のまゝで渡すなどいふ考はない。でも、何んにしても五月蠅いから車夫の云ふがまゝに今一度一角の小洋を財布から出して手渡ししてやつたのである。しかし目は放さないでどうするかと見めてゐたが、聽て又售票處の方へ向いて二三歩も足を運びながらすぐ後ろに振り返つて見たのである。と云ふのはかう云つた手合ひはよく、そのかねを地上に落し足の下に支那靴で以つてちつと踏んでかくして居ることがあるからつくりそれには違ひないと思はれたからである。

すると案の條、車夫は身を前に屈め手を伸ばし、爪先きをあげて靴の下から今にその銀色の圓いものに手をかけ摘まうとしてゐるのである。車夫の方ではまさか此の客があとを振り返つて見るなどとは思つても居なかつたであらうから安心してその靴の下に踏んでゐるかねを拾はうとしたのである。しかしこちらもさるもの、その手には掛からぬ。向かうのトリツクに陥るほどのお登りさんでもない。むしろ手を行くのである。そのトリツクのあることを見付けるやすぐさま自分

「オイ、オイ何をやつてゐるのだ、多分そんなことをするのだらうと思つてゐたが………」  
「靴の下の銀色のものはそれは何かね」と高飛車に浴びせかけたものだから相手は不意を打たれ

風俗・趣味



海上に見るパンオツ黄包車(力人)珍らし蹴込みの上  
がれものを示す

支那貨幣に伴ふ奇習

たのである。しかしそのやうなことできまり悪く考へるやうな殊勝な心を持つてゐる手合でもない。でも車夫は内心不足でも何でもない事を不足してゐるが如く云ひ出して二重取りをしてゐたのは事實であるから理屈は云はさない。唯こちらは笑ひながら、

「そらそこにそれを踏んで居るのは」

と云つてやると向ふも腹の底では判つてゐるにきまつてゐるから

「あとからの分は」

と云はるゝまでもなく閉口して譯なくその一角の小洋はこつちに返してくれたのであつた。

こゝに車夫風性のこととは別に取立てゝ云ふだけの必要もないが日本からの觀光客にしてよ

く約束のイークワイチエン（一塊錢）でもやらうものなら、あとから呼び止められ、車夫は、路傍で、

「今の一塊はこの通り質の銀貨だから取換へてくれる」

など、弄ばれ或はさうであつたかも知れぬと云つた氣持ちでもつて客はその云ふがまゝに従ふのが普通である。これは上海方面でいつも耳にする話であるが車夫の方では懐にかうした質錢は又はその周囲のぎざぎざの磨滅してゐるものなんかを豫め用意してゐて客の向ふへ向いた處であとから急にそれとすり換へ不慣れた客に付け込んで難題を持ちかけると云つたものがあるのである。車夫風情だからと云つて之を齒牙にかけぬつもりでゐたらいくらでもねだられたり、ほられたりする。されるがまゝに云ひなり放題になつてゐるとあとでひどい目に遭ふのである。

以上は支那貨幣の奇習と云ふうちにもその警戒を要する暗い方面のことをのみ叙べたのであるが實は他の半面に尙支那の社會や家庭ではその目出度い事のしるしに隨分貨幣をそのまゝ用ひることがある。或は正月の饅頭饅々などに青錢を入れておいて食べ當てさせる吉事や結婚の紅事に雙喜と云つて喜の字の二字連結した文字型を紅紙に切抜き之を一圓銀貨の片面に貼付して之を當の僕婢轎夫に心付けとして與へると云つた類の明かき面白い方面のことが又相當に發達してゐるのであ

る。その古來貨幣に對してはかなり濃厚な趣味が結付けられてゐるだけに明暗兩方面とも珍談奇習の特筆すべきものが多いのである。がこゝには唯そのダークサイドの方の一斑を列べて述べたに止めておくのである。

二十九繪文字の趣味

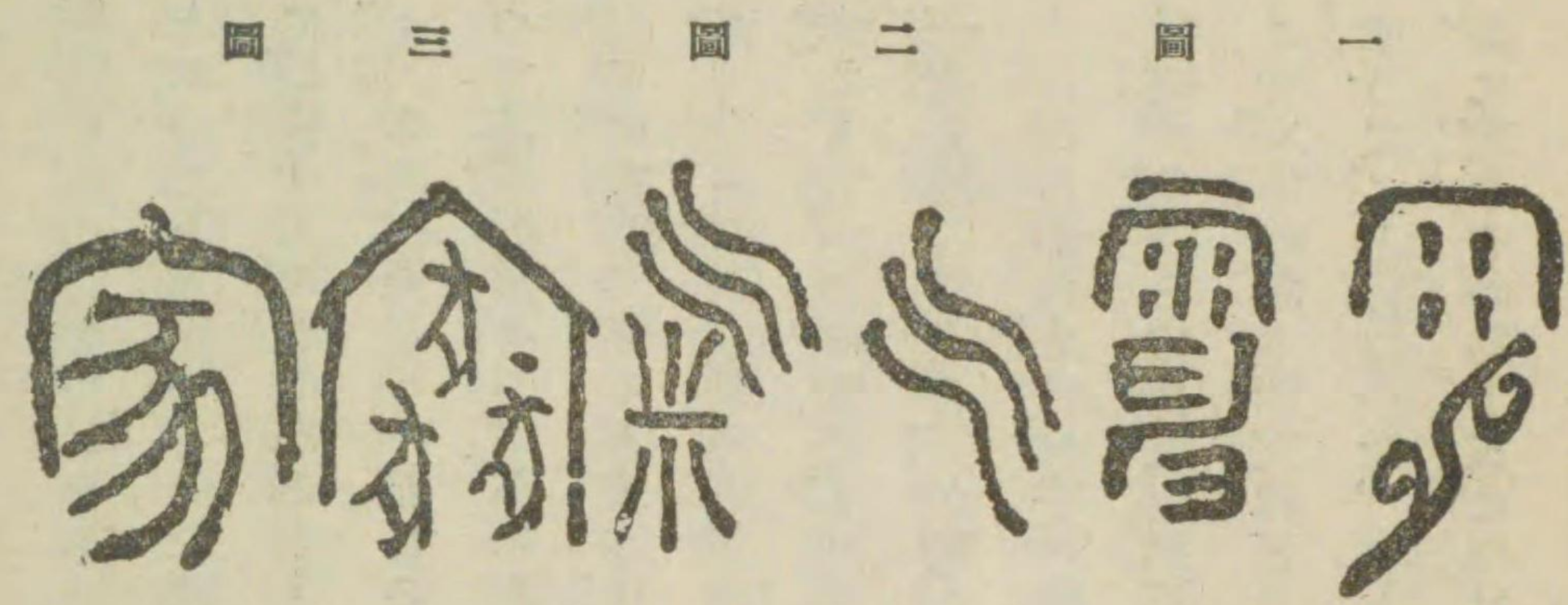
支那の文字に限らず埃及文字でも、アッシリア文字でもその起源は繪であつて描寫された線書キが抑もの形となつてゐるとは既に學者の認めてゐる所である。けれども埃及やアッシリアは今日その國が滅んでしまつてゐるが、ひとり支那はその繪畫時代の文字を用ひてゐた民族も今日の民族も同じやうな人種で大體漢民族たる支那人であることは疑ひの餘地がない。その今日支那文字として知られてゐる所謂漢字のうちには後世の發達によるものも多いが中には聯綿として太古以來その使用期間の實に長く幾千年と續いてゐるものがある。殊にそのうちでも天地、山川、風土に關する自然を現はした所の文字の如きは太古ながらの文字であつて殆んどその意味もたいして變更せられずそのまゝ用ひられてゐると云つた場合で文字の壽命の長きには驚かざるを得ないのである。

すべて文字はその社會に於ける使用の止まらない限り決してその生命の絶ゆると云ふことはない故にその社會に於いて文字の生命が持續されてゐるわけである。唯その時代の推移によつてその星霜を経てゐる間にいつしかその字形が變化し又その音が變化し意味が推移して行くと云つたやうに

變遷をして行つてしまふ。それ故、後世からその沿革を逆に遡つてその當時の形を考へ——考へると云つても製造するのではなくその太古に實際あつた品物からその文字を見出しそれを後世の文字に比較するの義である——幾千年後の今日太古の字形を再現するだけの努力を費して見ると云ふと自ら釋然たるものがあるのである。字音や字義の方も同じやうなものである。幾千年前の字音だつて蓄音機がその頃あつた譯ではないからそつくりの音の情態は判らぬけれども、適當なる方法を以て研究して見ると或る程度まですつかり判つて來る。字義の方もさうである。かうした字形、字音、字義の三方面の研究のうちで字形の方のことは古來その方面に支那の學者も大分出てゐるし日本でも大いに研究せられてゐるのである。說文學とか金石學とか云ふのは主として此の古代文字の研究を積んで之を明かならしめようとするにあるのである。

ところが近來は文字の調べが具體化し單に金石學だとか說文學だとか云つて書物の上や鐘鼎彝器碑碣の側からの研究を進めてゐたゞけでは本當の根本のところは判らないと云ふことになつた。そこで文字の根本研究はどうしても更に一層根本に遡り的確な證據を握らなくては安心が出来ないやうなことになつた。こゝに於いて鐘鼎とか碑碣とか云ふものよりも一步を進めて龜甲獸骨の發掘品に就きその龜卜文に現はれた文字中から眞の象形文字としての繪文字を見出さうと云ふことにな





つた。これでも象形と云つてゐた文字はまだ本當の繪文字ではなかつた眞の象形であると云ふものは此の龜甲文字を具體的につかまへてから始めて云へると云ふわけになつたのである。これは清朝の末年頃から大分支那河南省彰德府の田舎から土出して來るもので時には贗物もたくさんあるが大體この根本資料によつてその最初の繪文字をしらべると云ふことが本筋の研究であることでもある。

いまこゝにはこれらの珍らしい材料のうちから電氣なり家室なり照明なり今日吾人の日常生活に縁の近い關係のある文字のうちから比較的趣味のあるもの五六を摘記してそれらの文字の示す元始形式が抑も何をそれ〴〵指示してゐたかと云ふことに就いて平易に説明を試みて見ようと思ふ。それに就きその例にとる文字の選定法は別に意味があるわけではなく極めて普通のものと思ひ付きのまゝ採つてかりにこゝで示して見る。

百二十八 電氣家室

先づ電氣、家室の四字を採りこの順序に釋明して行かうと思ふ。

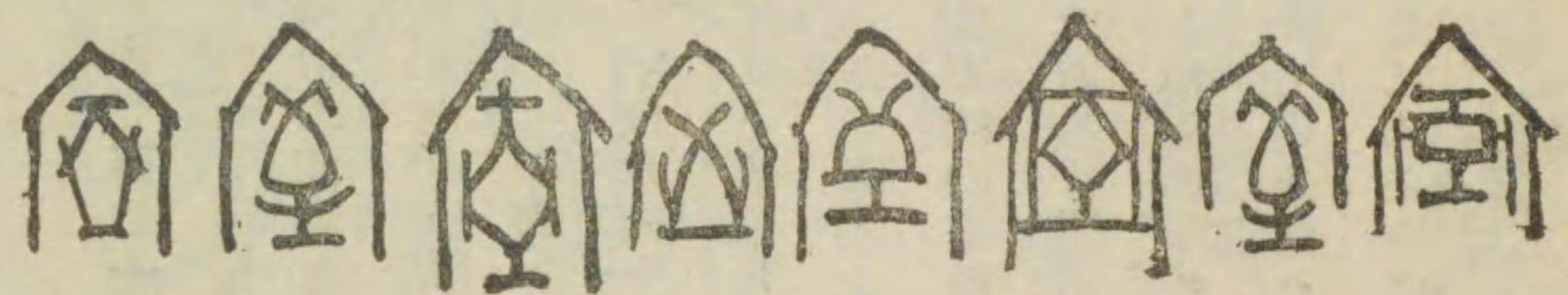
一圖右は電の字の元始形式雨の象形と雷電稻妻を示す象形。一圖左は電の字の小象を示す。もと電の下半は神の右半申と同形である。

電と云へる字は本來上半の雨冠りはついてゐないのが原則であるが、然し雷電稻妻の現はるゝ日には雨を伴ふこと普通なるを以つて雨冠りがあつても差支ない。本來その雨と云ふのは穹窿をなせる天の大空を示し天空より雨滴の落下するに象れることは云ふまでもない。下半ジグザグ式の中になつてゐる直線的のものは即ち電光稻妻である。その上下に一個宛旋渦狀をなせるは暗雲の渦卷を示せるものである。雷神の太鼓にもあたるものである神の字の如きも示扁の右方に此の申が書かれてあるが太古は電の下半と同様の形をなしてゐるのであつて、即ち電光そのものを神と信じ之を畏れ敬してゐたものと考へられる。電、雷、神は何れも兄弟關係の文字である。雷の下半は少しく趣を異にしてゐるところもあるが大體同様に聯想せらるべき文字である。

二圖右、天界の氣流が太古の民に考へらるゝ時はかのやうに考へられてゐた。その波狀線は三つと

支那繪文字の趣味

四 一 二 三 四 五 六 七 八



六〇四  
限られるに非ず。三つあるのは數多の氣流の義である。  
二圖左、人に芻米を贈るの義。籛の字の本字であるのが二次的の意  
味に變じてから空氣、陰晴、風雨寒暑などの氣を示すに至つたのであ  
る。

風が流れ行く方角、水の流れ行くかたち、すべて古代では此のやう  
な形に線で現はすのである。水ときは中央の線はそのまゝにして唯  
兩わきの波状線が中間を切斷されたやうに描かれてゐる。要するに空  
氣も水も象形文字としては先づ似たやうな形である。此の氣流の象形が  
かゝる方向をとれるは多く右手で書かれるによるのであつて、もし左  
手を用ひんか逆の方向になる事云ふまでもなし尙こは氣流の義でなく  
氣の立ち昇る象形と云ふ風に見てゐるものもあるがその見方もよろし  
い。そしてこの字から汽だの氣だの氣だのなど云ふのが生れ出  
てゐる。そのうち米の加はつたものは上にも云へる如く本來空氣その  
ものとは別なものを示してゐるのであつて氣流などの意味に用ひて來

るのは本義に合しないわけである。たゞその意味が變化したと云ふよりは同音の關係から氣の字を  
借りて來て空氣の方を指すことにしたに過ぎぬのである。氣の字の米の代りにメを入れたのは俗用  
の略字、古いところには頓と見當らないやうである。

三圖右、多數の豚を宿してゐる古代の豚小屋の象形今はそのうちの一疋のみを残す。

三圖左、家の字の小篆。もと假の字の音符を含んでゐたから家の字の音が出てゐるなど云ふも  
のあれど證據は更でない家の字の古いところには建物の形と其うちに象形の示す如く三疋の豚が書  
かれてゐる多數の豚を宿せる義である。豕の字の古形はかやうに線書きにされてゐる尙古代の家  
字には羊の三疋配合せられてゐるものもある。羊でも豚でも牛でも古代生活には何れも似たやうなも  
のである、牛羊豕の三者は古の大牢の御馳走にも出て來る位のものである。それから尙その豚小屋  
のそとに人間の手の象形の加へられてゐる文字を見ることがある。こは楷書や小篆の家の字とは關  
係のないことであるが附記しておく。

つまりかうした豚小屋そのものが今日人間の家屋として用ひられるに至つたのは轉義であるか、  
それとも太古は豚も人間も一緒になつて棲んでゐたものか。その邊は何とも云へぬが今日の支那の  
田舎生活に見る處によれば人と豚との同居説の方がむしろ尤もであるかのやうに思ふ。

大支那大系

説文には家の字にはむかし音符が入つてゐたのが省かれたのだと云つてゐるが果してどうかよく判らぬのである。それから豚の象形であるが太古に書かれてゐたものよりは後世のものゝ方が脚の数が多くなつてゐるやうである。實物の豚に變りはないのであるが一言しておく。

百二十六 室の字各種

四圖一の室の字の元始形式は多々あつて多少づゝ形が違つてゐるが大體窓の形を示せる點は同じである。

四圖二は室の字の小篆。これを見ると窓の形でないらしくも思はれる。

この室の字は大體家の形から來てゐることは考へられるがその字の至の字のところ果して窓であるかどうかよく判らないのである。或る人はこの室内の平面圖をかりに縦に書き現はしたもので窓の形でないかも知れぬと云つてゐるがそれも何とも云へぬ。こゝには序でながら他の五六の室の字の古形を列べて見よう。

かやうにいろゝあるのであつて全く判じものゝやうな譯であるが何れを以つて正形となすべきかも決定しにくい。何れも皆正しいと云へるのである。中には室の入口の飾りの如くに見えるもの

もある。しばらく記して後の學者の參考に供しておく次第である。尙出典や鐘鼎の名前は各古文の下に略記したのである。

風俗・趣味

支那風俗趣味の新傾向

60  
2

三十 支那風俗趣味の新傾向

百二十七 動かない支那の民族性

支那の風俗と云ひ趣味と云ひかうした民衆的の動きによつて支配されてゐるところのものは常にその時代の大きな流れに従つて着色されて行くものである。今日の支那にはサンミンチウイ(三民主義)に因る國家勃興の宣傳とその思想が盛であるが、新支那と云ふものゝ勢力が、益々頭を擡げて來た昨今の情勢の下には、觀方に依つては民國の現状から自覺して、民族の爲め、民權の爲め、民生の爲めにと云つたやうなその標榜の言葉に添ふやうな一種新しい裝ひをした思想が勢を得て來た。その爲めに之を背景とする風俗があちこちに現はるゝやうになつた。従つて從來からある根柢の深く、且つ廣い所謂支那風俗とか支那趣味とか云ふやうなものは、これ等の新式の風俗趣味の擡頭によつて貶されたり疎んぜられたりすることがいくらかはある。けれども、併し多年何と云つても支那四百餘州を動かしてゐるアンダー・カーレントなるものは、矢張り從來の大きな支那風俗とか大きな支那趣味とか云ふものである。こゝの點は動かされないものである。ところがやゝもすれ

ば新しがり青年達や、突飛な民國學生などは、舊支那のすべてを無視し、さうして徹底的に種々な社會運動をおつばじめ居るけれども、そこには色々の無理があるやうである。或は古老の人達とか地方民とかゝらひどく反感を招き初め法律を出しておきながら又その法律の取消しをしなければならぬやうな事もあつた。民衆、大衆に永年深く喰ひ入つてゐる所の風俗趣味の方は、容易にこれを無視することはできない。支那は國としては新しくなつたとも云ひ得るけれども、しかし依然として尙三千年の古い支那の舊態をその儘に存し、今後永久の支那の根柢をなしてゐる所は、少しも變りはないとも云へる。唯表面の小波だけが時勢に調和するやうに、又青年の意氣に合するやうに變化して行つてゐると云ひ得るのである。

百二十八 洋風化せる趣味の傾向

最近の上海あたり流行せる新しい傾向、モガやモボの跋扈してゐる情態から、總べての調子を見てもみるとアメリカかおれをして何となく日本の最近の有様とよく似てゐる。丸で米國萬能の氣持が風俗の上、又趣味の上に行はれ舊來のゆかしい音曲を捨てゝダンスに走るとか、又ダンス本位の輕佻浮薄な空氣が年一年と多く這入つて來るとか云ふ有様である。實際古典的の音曲を手で

支那風俗趣味の新傾向

60  
2

やつて見ることを忘れてしまつて、蓄音機のレコードのみにたより又その方が安上がりでよいと云つた世の中に變つて來た。又芝居の如きも大變な變りかたで、有名な役者であると矢張り北平の方に居残つてゐて、決してけぼしい當世式の上海には下つて來ることを喜ばない。それ故に、上海の天地には芝居と云へば現代式の新派の方が多く繁昌してさうして舊派の芝居は入りが悪いと云つたことにもなつてゐるのである。又衣服にしても餘程新式になつて舊來の式を破り、帽子の形も北平の支那帽の如く肩の張つたものは次第にすたれてなるべく肩のカーヴの少ない西瓜皮式帽が流行つて來るやうになつた。又靴の形なども上海の支那靴は北平のそれとは餘程軽くハイカラになつてゐる。食事にしても第一食器などが支那本來の匙を用ひないで、洋食に使ふ匙を出して來たり、皿なども洋食の皿をその儘持出すと云ふやうな譯になり從來の支那獨特の模様を描かれたものは段々と出なくなつて來た。時折り支那料理店で番頭に向かひ、何故こちらでは舊來の支那式の皿を用ひないのかと聞いて見ると云ふと、「あゝ云つた舊式の皿では客の氣持に添はないから、これに取替へました」云々と云ふやうなことを云つてゐる。客自身もさう云ふ新しい氣分で支那料理に向かふ風がある。殊に又最近には「中西菜館」と云つて、洋食と支那食の合の子の料理と云つたものが段々歓迎せられるやうになり、或は洋食屋であつて支那料理をほんの申譯の爲めに兼業してゐると云ふのもある。客が來ても洋食の方なれば直ぐできるが、支那料理の方は随分待たせると云つたやうな風に段々と支那食よりも西洋料理化して來る傾向が見えるのである。無論これは上海だけに就いて云ふのではない。けれども、最近殊に上海では之が著しくなつて來た。その他アメリカから入れる雜貨類、家具類などが少なからぬ額に達してゐるが、日本から入れる雜貨なども、西洋マークのレツテルを入れ、金ピカのローマ字を入れたものが多く支那人の嗜好に適すると云つた風になつて來た。心ならずも西洋萬能と云つた空氣が雜貨の上にも現はれて來た。この傾向は詰り新支那の嗜好に投じた譯であつて、日本から入れる菓子も、英語のレツテルを附けて出した方が歓迎せられると云ふやうになつた。

斯やうな風に、何事につけてもハイカラな傾向を採つて來た爲めに、青年の間などでは詩を作つたり、文人風の文學の稽古をしたりするのは最早頭が古い舊式の人間であると云つたやうにけなしで掛かるものさへも見るに至つた。それで段々とステツキを持つたり寫眞機を持つたりして、西洋人の眞似をして歩くものが多くなり、中にはゴルフに夢中になつてゐるものもある。

百二十九 支那趣味に對する懷古の情

系大那支大

翻つて考へて見ると、支那の人は一朝にして國家を覆へし、舊來の文化を全部投げ棄て、何等未練がましい所がない大きい處を有してゐる。變化させる時には徹底的にこれを叩き壊してしまつて、さうしてすつかり丸裸になりそれから又新規時直しと云ふことをやる。從來何十回となく之をやり來たつてゐる。それ故、支那の青年者流が、舊來の文化を全部破壊してさうして新支那の建設に努力してゐると云ふその意氣は或は賞讃すべきであつて、必ずしも咎むべきものでないかも知れぬ。必ずしも之を非難すべきものでないかも知れぬ。次に來るべき中華民國の文化と、その風俗、趣味は、如何なるものになつて現はれるか、蛇が出るか蛇が出ないか判らない。たゞ有り來たりの文化に憧れを持つてゐるものから云ふと、その一足跳びにダンスに入り、一足跳びにゴルフの道具を持つて走る手合ひを一概に貶す譯にはいかないのである。

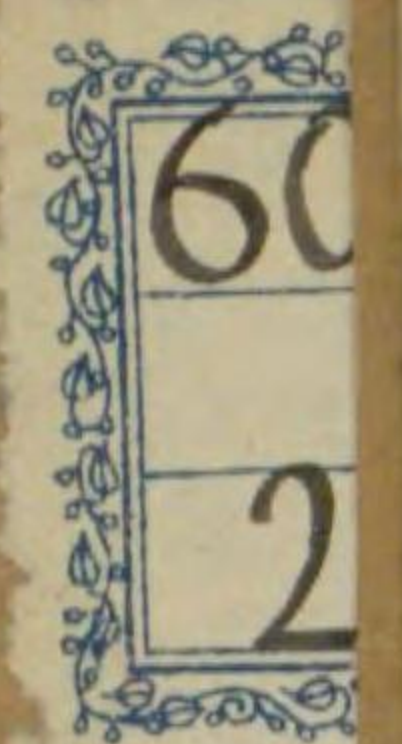
元來國家そのものを何とも思はず之を或る方便に使ひ、戰爭をも方便に使つてゐると云ふ大きな柙を自由に自分で運用してゐる支那民族のことであるから、眼中國家なく、眼中古典なく又その文化なく、又眼中風俗趣味などのあらう筈はないのである。なくて而かも更にその新しいものを建設しやうと云ふ。その意氣は何ものも之を妨ぐることができない。列國の制裁も國際聯盟も何もの之に對して遠慮などしない、と云ふのが實際の赤裸々な所なのである。一風俗、一趣味に拘泥してゐる

味趣・俗風

やうな、さう云ふめ、しい所はないと云ふのが支那民族の一の特色となつてゐる。併かし折角のこれまで苦心、前時代までに築き上げた所の文化の何ものかは今日に於いて少しなりとも支那民族自身に於て保存するやうに心掛けて貰ひたいものであると云ふことを老婆心までに附加して置く次第である。この頃例の乾隆皇帝の皇陵が發かれて見たり、西太后の墓が破壊されて見たりなど、随分徹底的に思ひ切つたことが行はれてゐたりする所から見ると、今日隨喜の涙に暮れてゐる孫中山先生の墓陵の將來なども、或は三百年五百年後の支那になつてから振りかへつて見た場合には、どうなつてゐることやら、過去の歴史に照らして見ると頗る憂慮に堪へない氣持がしてならぬ。併しそれも一時のこと、結局永久に遺る所の支那なるものは、國家そのものでなく、やはりこの偉大なる民族である。社會であると思はれる。その民族なり社會なりから生み出す所のものは即ちその最も麗はしい新古の支那文化でなくてはならぬ。或は又その間に滲み出てゐる所の風俗であり、趣味でなくてはならぬと信するのである。

この意味に於て自分は滿腔の同情と研究心を以て、支那三千年の風俗趣味を崑崙山の下に又揚子江の江邊に樹立して、支那四億萬の大衆と共に、吾日本を含む東亞の諸國の青年と共に、この方面に向つて一臂の勞を捧げたいと云ふ氣持を持つてゐるのである。江湖の讀者諸君は、この點に於

支那風俗趣味の新傾向



大支那系

て自分の支那風俗、趣味に對する根本的の考へと又その態度に就いてもしも誤れる所がありとすればこれを叱正し、同情の心と誠意とを以て之が研究を進め、又この方面の趣味の發揚に向かつて盡されんことを希望して止まないものである。

六一四

昭和五年五月十五日印刷  
昭和五年五月二十日發行

大支那大系 第八卷

風俗趣味篇奥附

(非賣品)

不許複製



著者	後藤朝太郎
發行者	小竹即一
印刷者	池端印刷製本所
製本者	池端榮藏

發行所

東京市日本橋區東京驛東口角  
振替東京七七二一〇

萬里閣書房

60  
2

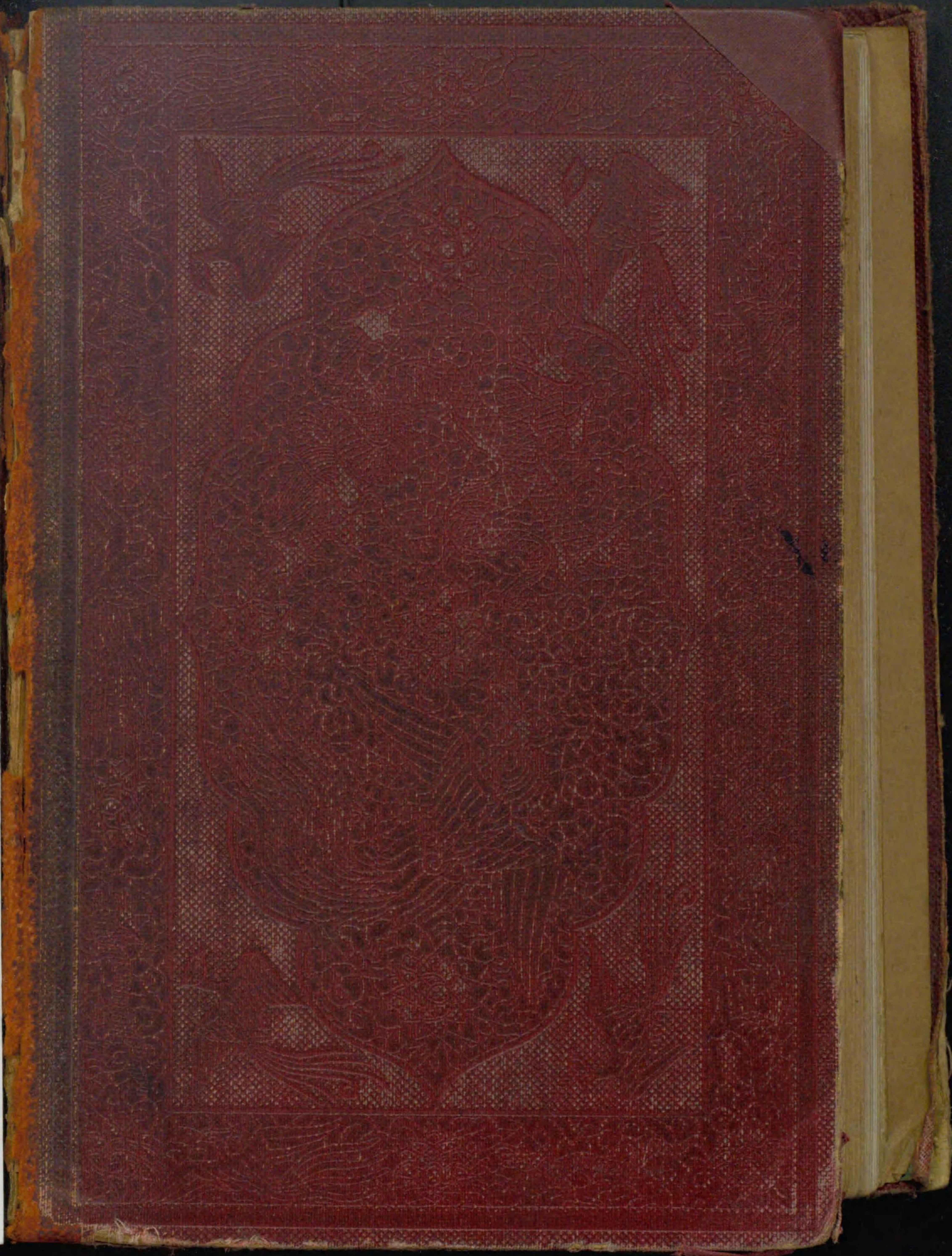
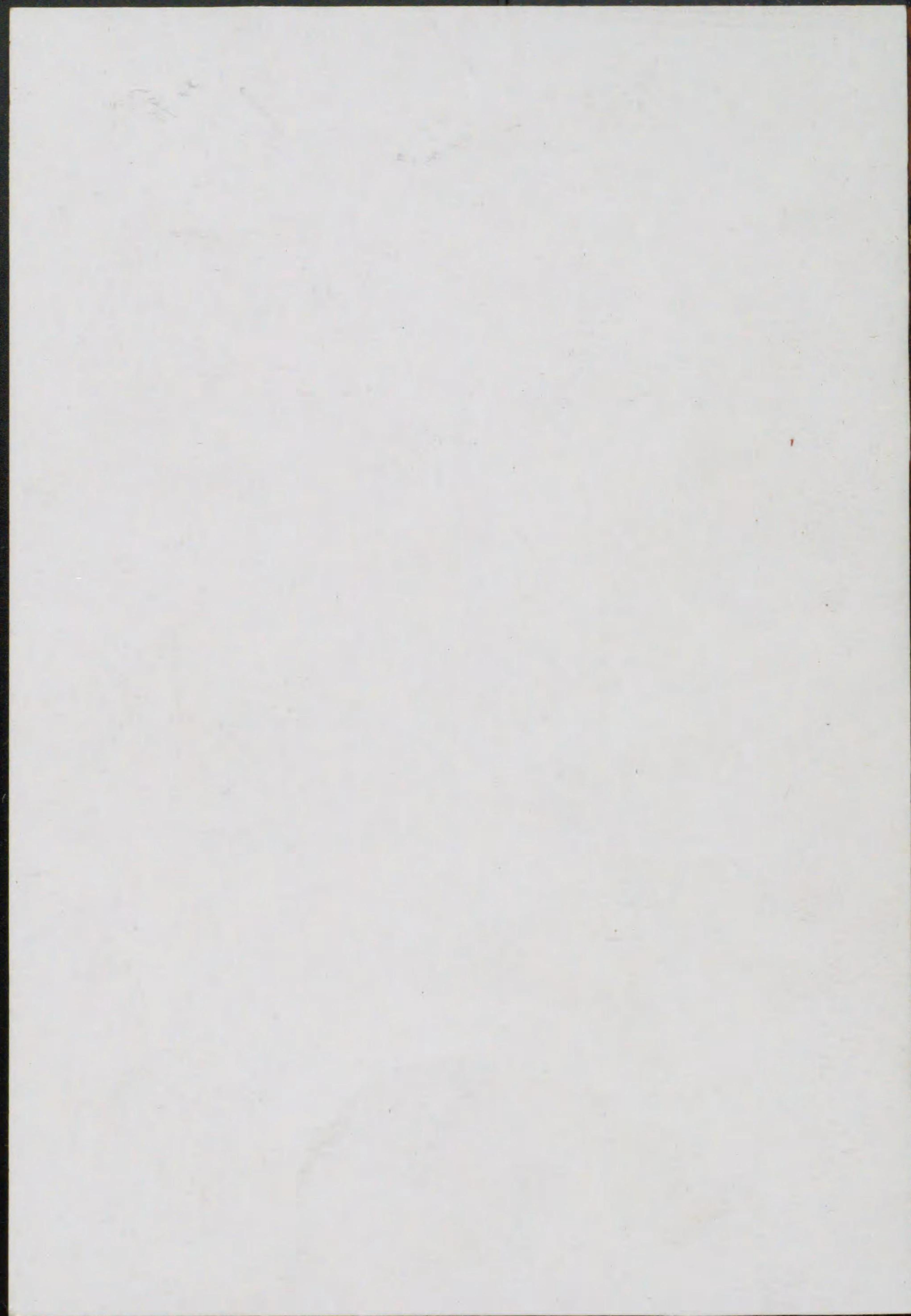
60  
2





... 宗 用 令 ... 王 少 曰 于 孟 不 ...  
... 王 命 杜 琦 王 明 琦 也 却 照 ...  
... 方 野 志 入 甲 杜 雲 却 委 瀆 ...  
... 榮 意 初 瘵 咳 香 古 不 果 盟 ...  
... 亦 三 方 共 咳 齋 辰 空 合 會 ...  
... 亦 三 方 共 咳 齋 辰 空 合 會 ...  
... 亦 三 方 共 咳 齋 辰 空 合 會 ...  
... 亦 三 方 共 咳 齋 辰 空 合 會 ...  
... 亦 三 方 共 咳 齋 辰 空 合 會 ...  
... 亦 三 方 共 咳 齋 辰 空 合 會 ...

602  
21

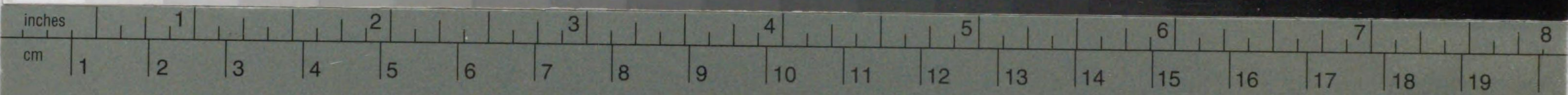


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

